

# One Purpose

FOR BETTER COMMUNICATION

 同志社大学通信  
DOSHISHA UNIVERSITY



203

2021 April

## 特集1

同志社－ダイキン  
「次の環境」研究センター  
始動！

## 特集2

COVID-19  
Research Project

同志社人訪問

日本盛株式会社 代表取締役社長

森本 太郎さんに聞く

COVER INTERVIEW  
My Purpose 挑戦する人

My Purpose 挑戦する人  
を動画でCHECK!



# CONTENTS

2021 April No.203

- 2 **特集 1** 同志社－ダイキン  
「次の環境」研究センター 始動！
- 7 **特集 2** COVID-19 Research Project
- 9 **Seminar** ～ゼミ探訪 学びの時間～  
文化情報学部 阪田 真己子 研究室  
グローバル・コミュニケーション学部 須藤 潤ゼミ  
神学部 越後屋 朗ゼミ  
社会学部 小黒 純ゼミ
- 11 2021年度 予算編成方針について
- 12 同志社大学 2025  
ALL DOSHISHA 募金のご案内
- 13 **INFORMATION**  
新任教員紹介・退職教員／2021年4月 同志社大学新島塾 第3期開塾／  
リベラル・アーツを受け継ぐ「全学共通教養教育科目」／本学教員の執筆図書紹介
- 18 **INTERVIEW** ～同志社人訪問～  
日本盛株式会社 代表取締役社長  
森本 太郎さんに聞く 
- 21 **My Job, My Life** ～私と「仕事」～  
中島 勇紀さん（2016年 法学部早期卒業 2018年 同志社大学法科大学院 修了）  
木村 瑠花さん（2018年 社会学部教育文化学科 卒業）
- 23 **COVER INTERVIEW**  
**My Purpose** ～挑戦する人～  
中山 尚さん（文学部国文学科 2年次生） 

## お知らせ

「One Purpose」は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションを図ることを目的として発行しています。  
同志社大学の最新情報は随時ホームページでお知らせしております。ぜひご覧ください。▶ <https://www.doshisha.ac.jp/>

卒業生の住所変更、発送停止を希望される場合の連絡先は以下にお願いします。  
校友課 TEL: 075-251-3009 MAIL: [ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp](mailto:ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp)



環境課題をテーマにした「包括的連携協力」協定の研究拠点

## 同志社－ダイキン

# 「次の環境」研究センター 始動!

ダイキン工業株式会社  
井上 礼之 取締役会長  
兼グローバルグループ代表執行役員

同志社大学  
植木 朝子 学長

先進の環境技術研究を得意分野とする同志社大学と

「環境ビジョン2050」を掲げ、その実現のために協創を推進する

ダイキン工業が「包括的連携協力」協定を締結。

2020年に学内に誕生した「同志社－ダイキン『次の環境』研究センター」は  
循環型環境社会の実現に貢献する実践的研究開発の研究拠点です。

さらに本協定では文理の多様な知識を駆使して

次代を担う「社会イノベーター」の養成に取り組みます。



## ダイキン工業の環境技術戦略と同志社大学の得意分野が合致

**植木** 今回の「包括的連携協力」協定の締結以前から同志社大学は積極的に環境問題に取り組んできました。2004年に工学部（現：理工学部）環境システム学科を設置。2007年にはエネルギー変換研究センターを本学最初の先端的教育研究拠点の一つに指定し、循環型環境社会の実現に向けた研究拠点として国内外の大学、研究機関、民間企業と共同研究を進め、社会実装を視野に入れた実用性の高い研究をしてきた実績があります。ダイキン工業とは2017年の連携大学院協定を皮切りに、共同研究を推進してきました。環境問題に関する技術的な研究は、本学の得意分野であり、その成果を通じて社会に貢献することを目指しています。しかし、大学単体では社会実装へのハードルが高く、産学連携によって企業のリソースを活用する道を模索していました。具体的には、本学の研究成果である二酸化炭素を分解し、酸素や炭素などの化学物質を生成する技術の活用による社会貢献を願っており、これを実現するためのパートナーとして空調機器メーカー最大手のダイキン工業のお力を拝借し、大きな成果を出せればと思っています。

**井上** ダイキン工業では、デジタル革命や環境問題への対応、「SDGs（持続可能な開発目標）」の実現といったパラダイムシフトの時代に即応し、事業発展を続けるために、「自前主義を脱却した協創イノベーションの実現」を掲げ、大学や研究機関との包括連携を進めています。特に環境問題に対しては、空調機と冷媒を併せ持つ世界唯一の企業として積極的に取り組んでいます。国際エネルギー機関（IEA）の予測では、グローバル市場での空調需要は2050年に現在の3倍になると予測されています。この拡大する空調市場に対応するためには、幅広い環境技術開発に取り組まなければなりません。

そこで当社は2018年に「環境ビジョン2050」を策定し、「事業活動及び製品・サービスに起因する温室効果ガス排出を実質ゼロにすることを目指す」と宣言。これを実現するために、「製品ライフサイクルでの温室効果ガスの削減」、「当社製品ライフサイクル以外での温室効果ガスの削減への貢献」という二つの取り組みを推進しています。このようなタイミングで同志社大学から包括的な連携拡大のお声がけをいただき、環境分野の重要課題である「二酸化炭素の室温分解技術」や「空調機の省エネルギー化の極限追求」などのプロジェクトが創出できました。当社の環境技術戦略と同志社大学の環境分野での強みが整合し、締結合意に至りました。

**植木** 包括的連携協定は大学全体、すなわち「組織」としてコミットメントすることにも意義があります。本学に他組織の考え方や文化を取り入れることで組織が活性化することを期待しています。グローバル企業であるダイキン工業と組むことで、本学の特徴でもある国際性、多様性を推進する教育にもさらに広がりができると考えています。

**井上** 東京大学や大阪大学に続いて同志社大学と協定を締結したのは、当社にとって非常に重要な環境分野の研究に注力されており、機械・電気・材料の技術分野融合で

の強み・技術を活用できる研究テーマを見出したことが最大の理由です。さらに、環境問題を解決し、社会実装していくためには、技術だけでなく、社会・倫理・文化などの多面的な視点を積極的に取り入れていくことが必要不可欠です。同志社大学は文理融合を推進されており、多様性に長けています。横串の連携で共同して何かを成し遂げるという文化に、大きな魅力を感じています。

**植木** 数多くの大学の中から、同志社大学をパートナーに選んでいただき、光栄に思います。大学の責務である研究成果による社会貢献、すなわち社会実装をダイキン工業のお力をお借りして実現したいと願っています。また、協働で人材育成を行うのも、この協定の際立つ特徴です。学生と技術者が共修し、協創するプログラムに期待しています。

## 二酸化炭素の再利用など先端研究の社会実装を目指す

**植木** 共同研究を行っている「二酸化炭素回収・分解・再利用技術の開発」と「エネルギー損失の極限を追求する環境技術テーマの研究」は、いずれも持続可能な社会の実現に大きく貢献する最先端のテーマです。環境問題を多方面から追究し、資源・エネルギーを有効利用する方法と共に、環境への影響を科学的な手法で立体的・総合的に明らかにし、人間と地球のより良い明日のために具体的な解決策を提示できる専門家を養成することが本学ならではの責務だと考えています。環境問題を考えることは社会の在り方を問うものですから、社会そのものへの理解、すなわち人文・社会科学の見識も重要であり、総合大学としての本学の強みをフルに活用しなければならないと考えています。

**井上** 「室温での二酸化炭素分解技術の開発」では同志社大学独自の「二酸化炭素の電気分解技術」に当社の「フッ素化学技術」を組み合わせることで取り組んでいます。フッ化物系の材料を活用することによって二酸化炭素の分解温度を下げるのが可能になります。二酸化炭素を分解して有効活用する画期的な技術であり、植物の光合成をも凌駕するものです。当社のAI活用技術も駆使



して挑戦し、技術開発を加速します。「空調機の省エネルギー化の極限追求」では当社が得意とする「空調の要素技術」と同志社大学の「インバータ・圧縮機・熱交換器の3つの分野における優れた技術」を融合し、それぞれの技術分野の極限に挑み、空調機のさらなる省エネルギー化や冷媒漏洩の低減を図ります。非常に高度化された技術領域でのブレークスルーを狙う、ハードルの高い挑戦になります。

**植木** 人材育成では自然科学と人文・社会科学の知識を併せ持ち、未来の社会全体をデザインする「社会イノベーター」の養成を目指しています。その教育プログラムとして「次の環境」協創コースを今年度から開設します。本学の14学部16研究科の多様な領域から構成する基礎科目、環境技術科目、地域環境科目を通じて理工系科目にとられないユニークなカリキュラムを準備しました。このような文理を融合する知識を持って柔軟に考える力を身につけるために、学生と社会人が共修し、次代の環境と社会を協創する「フューチャーデザイン演習」などに取り組みます。

**井上** 当社は一人ひとりの個性を活かすダイバーシティ・マネジメントを推進しています。企業には特定の専門分野を徹底的に追求するI字型人材、特定の専門分野を持って幅広い知識をバランス良く身につけたT字型人材が必要です。さらに、「次の環境」協創コースでは、特に二つの専門性を横串でつないでいくII（パイ）字型人材が育成されることを期待しています。そのためには、専門分野と異なる多様な意見を理解する力が必要であり、その基本となるのが、何よりも横串での対話です。本コースは新たな専門性を高め、全体を横串で俯瞰する能力を磨く格好の場になると考えています。

**植木** 本学の学生とダイキン工業社員とが共修する場は、学生にとっては、自らの研究テーマをより実践的に理解する機会となります。社員の方には知識の吸収、発想の鍛錬、研究の実践に取り組んでもらいます。企業のニーズに大学の知で貢献し、未来を協創する環境を構築したいと願っています。

**井上** 環境社会に貢献するイノベーション実現のためには、「課題をつくる人、問いをつくる人」がとても重要です。当社の社員

と自由で多様性・挑戦力に富んだ同志社大学の学生・教員の方々が共に考えることで環境問題をブレークスルーするような新しい問いが生まれ、そこからイノベーションテーマを見出し、社会実装につなぐ人材が養成されることを望んでいます。

**植木** いま、「問いをつくる人」が重要というご指摘がありましたが、本コースには「ミッション研究」という演習科目があります。協創から生まれたアイデアを共同研究にすすめる試みです。教育の場から研究テーマを創出するというチャレンジングなものです。「次の環境」というテーマには「ミッション研究」につながる題材がたくさんあるのではないのでしょうか。「同志社-ダイキン『次の環境』研究センター」がリードするこの分野の教育をタイムリーに実施できること。これこそが組織間連携のダイナミズムです。また、サイエンスを正しく使うには、確固たる倫理観が不可欠です。本学の建学の精神である「良心を手腕に運用する」ことが必要であり、倫理観を養うには文理融合の教育が大きな効果をもたらすと確信しています。これはイノベーション創出にも必ず役立ちます。

の環境』研究センター」がリードするこの分野の教育をタイムリーに実施できること。これこそが組織間連携のダイナミズムです。また、サイエンスを正しく使うには、確固たる倫理観が不可欠です。本学の建学の精神である「良心を手腕に運用する」ことが必要であり、倫理観を養うには文理融合の教育が大きな効果をもたらすと確信しています。これはイノベーション創出にも必ず役立ちます。

**井上** 技術者も良心を持たない技術者は時に判断を誤り、理想の未来を想定できません。協創を通じて「未来を描ける人材」を育成できることは、当社にとっても非常に有意義なことだと考えています。また、組織対組織の包括連携では、双方の組織のトップ、幹部、現場のメンバーが一体となって本音でぶつかり合いながら取り組み、「問いから共に考える」ことに大きな意味があります。

## 多様な知の協創によって「次の環境」の創出を牽引

**植木** 今回のコロナ禍でも痛感したのですが、前例の積み重ねによって秩序化されたものは、条件が変わると途端に役立たなくなり、新たな事態には対応できません。一つの枠組みにはまらないことこそが揺れ動



くこれからの社会では重要です。学生たちにとってこの連携は、変化し続ける社会を学ぶ場としても大いに機能します。

**井上** 「次の環境」を提案し、実現していくためには、それぞれの組織がお互いの得意分野を活かしながら共同体としてチームワークを醸成することが大切です。協創で問いから共に考えて新しいビジョンやテーマを生み出す人、それを実現するために研究開発を推し進める人、その成果を市場や顧客に向かって社会実装していく人、それぞれに向いた最適な人材がいると思います。当社と同志社大学の良いところを両面吸収した多様性に溢れるイノベーション人材を輩出していきたいと思います。グローバルレベルでの環境課題に、技術視点のみではなく、人文・社会的な側面も入れたルール・規制づくり、排出権取引なども視野に入れたビジネスモデルの検討などダイナミックに連携することで「多様な知の協創による環境社会への貢献」に挑戦していきます。

**植木** これを次の世代に快適な生活環境を提供するための知と技術を提供する仕組みとして機能させます。この核となるのが、今回の協定であり本学の教育を大きく発展させる礎とします。



倫理観の中核に「良心」を置き  
次代の環境と世界の在り方を統合的な観点から提案・実現できる  
卓越した「社会イノベーター」の養成を目指す

## 高等研究教育院・アドバンスト・リベラルアーツ科目群 「次の環境」協創コース開設

### 大学院生と社会人が共修し 画期的な新技術アイデアを協創

**後藤** 地球温暖化は世界の環境に悪影響を及ぼす深刻な問題であり、各国が全力を尽くして取り組まなければならないきわめて重要な課題です。2015年開催の国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）において、「パリ協定」が採択されました。翌2016年には、皆さんご存知の「京都議定書」に代わる「2020年以降の温室効果ガス削減等のための新たな国際枠組み」が発効され、すでに4年が経過しています。また、「持続可能な開発目標（SDGs）」（2015年国連サミット採択）でも「気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる」を目標の一つにしています。さらに、日本政府も2050年に向けて温室効果ガスの実質ゼロ化を掲げています。いま、環境問題は全世界が注視する課題です。有効な対策を講じず、放置すれば、地球の平均気温は上昇し続け、取り返しのつかない事態に陥るからです。このような世界の状況に即応し、次代に画期的な研究成果で貢献するために、同志社大学とダイキン工業は環境課題をテーマにした実践的な研究開発を推進する「包括的連携協力」協定を締結しました。そ

の研究拠点となるのが同志社大学内に設立した同志社・ダイキン「次の環境」研究センターです。現在、二つの分野で共同研究に取り組んでいます。一つは二酸化炭素を資源として再利用し、その徹底的な削減に挑む「二酸化炭素回収・分解・再利用技術の開発」。もう一つは空調機の各要素技術の最適設計によって最大限の効率化を試みる「エネルギー損失の極限を追求する環境技術テーマの研究」です。さらに、この協定では最先端の共同研究と共に、次代の環境と世界の在り方を統合的な観点からデザインして国際社会に提案し、実現できる人材の育成を目指しています。その教育プログラムが2021年春学期から開設する「次の環境」協創コースです。

**石川** 次代に相応しい循環型環境社会の在り方を考察し、これらを社会実装していくためには、科学技術だけでなく人文・社会科学などの多面的な視点や知見などを積極的に取り入れていかなければなりません。テクノロジー一辺倒ではこれからの環境問題はクリアできないのです。同志社大学が積極的に推し進めている文理融合による探究が不可欠だと考えています。イノベーションの創出においても、専門分野を超えて広く学ぶことは大きな成果を得るための

重要なファクターになります。また、「次の環境」を創出するサイエンスを正しく使うためには、揺るぎない倫理観が問われますが、この根幹に求められるのが同志社大学の建学の精神にも謳われる「良心」だと確信しています。倫理観の中核に「良心」があれば、理想的な「社会イノベーター」として国際社会に貢献できるはずで、このような観点から「次の環境」協創コースは、高等研究教育院・アドバンスト・リベラルアーツ科目群のコースとして開設されることになりました。アドバンスト・リベラルアーツ科目群は、2021年度にスタートする大学院の共通科目で、専門の狭い領域にとらわれない広い視野と高い精神を涵養するリベラルアーツ教育の理念に基づき、「良心」を精神的支柱として国際社会で活躍できる人物の育成を目指します。培いたい能力は「普遍的な見方から全体像を捉える俯瞰力」、「複数の専門知を組み合わせる事象にアプローチできる総合力」、「未来を読み解く想像力」、「良心を支柱に人間社会の将来の在り方を示す提案力」です。

**後藤** 同志社大学では、一つの学部・研究科の優れた取り組みを文系理系の枠組みを超えて全学的に展開するというのが自然になされており、横串の連携で共同して新





たなものを成し遂げるという姿勢が浸透しています。これは他大学にはない際立つ強みだと考えています。大学院生とダイキン工業社員が共修するプログラムも画期的な試みです。共に知識を吸収し、互いに発想を鍛錬し、研究の実践に取り組み、次代の生活者の在るべき姿と必要となる新技術アイデアを協創し、それを社会に生かすことを目的にしています。これらは「同志社大学 VISION 2025」の中の「学びのかたちの新展開—大学院教育改革の推進」、「創造と共同による研究力の向上—文理融合や領域横断による融合研究の創出」などにも合致するものです。

## 文理融合による学びが 際立つ俯瞰力や独創力を培う

**石川** 私が大学で学んでいた時代の環境問題は「公害」と呼ばれていました。まだ、ローカルなものだった。それが時を経て地球規模のグローバルな問題となり、刻々と拡大しています。例えば、自然災害の多発や水・食糧の枯渇などを引き起こし、経済的なダメージも甚大です。いま、私たちは「従来の環境」から「次の環境」へ視野を広げ、即応しなければならない。現在の最重要課題の一つは地球温暖化です。これを回避するためには二酸化炭素排出量を実質ゼロにすることが肝要です。カーボンニュートラル（二酸化炭素の排出量と吸収量がプラスマイナスゼロの状態）への挑戦は、まさに大きな社会課題解決へのチャレンジなのです。大学と企業が積極的に協力して「次の環境」の課題に挑み、解決すべきなのです。その最前線に立ち、国際社会を牽引する「次の人物・人材」を輩出するために開設したのが「次の環境」協創コースです。

**後藤** 「not in my back yard」という言葉があります。「私の家の裏庭には作らないでほしい」という意味です。例えば、ゴミ焼却施設などの必要性は認めるが、居住地の近くに造られるのは困るという考え方です。次代に向けて、この発想はもう成り立

たない。私は人間の皮膚を一つの境界として捉え、その内外を通じてすべてがつながっていると考えています。この理念を「次の環境」協創コースで提示し、理解してほしいと願っています。

**石川** 昨年「次の環境」協創コースの開講科目の一つである「フューチャーデザイン演習」を試行し、環境文学を担当される先生に参観していただきました。学生と社会人が議論を重ねながら新技術アイデアを協創する演習です。その時「（演習の成果である未来予測の）いずれのシナリオにも、近未来小説に見られるような文学的テーマを発見することができてワクワクしました。このような言葉の力によって新しい技術が発想されていくという体験はとても新鮮で、あらためて人と科学技術の関係性を考えさせられました」というご感想をいただき、科学技術と文学との接点をズバリと言いつたことに大きな感銘を受けました。中東の文化を研究されている先生は「イスラムと日本の文化には隔たりがあり、多くの日本人はイスラム文化を理解するのが難しい。だからこそ、それを深く学んだ時、グローバルとは何かを実感できるはずです。『意識が変わる』ようなインパクトのある講義がしたい」とおっしゃいました。経済学の先生からは「自身の生活を維持するために、環境にどれほど多くの負荷がかかっているかを知ることは、自然環境が有限であることを前提とした持続可能な経済活動の在り方を深く理解するのに役立つ」というお話を伺いました。また、大学院のビジネス研究科では、本コースの設置をきっかけに「良心と企業経営」「ダイバーシティマネジメント」といった科目が新設される予定です。コース設計をしていく過程で、科目を担当される多くの先生方から貴重なご意見、ご提案をいただきました。いずれの先生方にも私たちの思いを的確に受け止めていただいたことに深く感謝しています。

**後藤** 私もコース設計のために、各分野の先生方とディスカッションを繰り返しました。その中であらためて文理融合の重要性を実感し、本コースの必要性を確信することができました。

## 本コースで育成したいのは 「0から1を創り出す人材」

**石川** 本コースは、本学の14学部16研究科の多様な領域を融合した先進的なカリキュラムで構成されています。開講科目は、倫理と環境の関係など現代の環境問題に必要

とされる視座の拡大を図るための「基礎科目」、地域学的な環境問題の本質にある宗教、文化、社会制度の違いがどのようにして発生するのかを考察し、グローバルなビジネス展開における課題の解決の指針を得る「地域環境科目」、持続的経済目標の達成に貢献する開発手法の基礎を学ぶ「環境技術科目」。さらに、学生と社会人が共に現在の自分を未来に置くことによって将来世代の視点に立った新技術アイデアを協創する「フューチャーデザイン演習」、新技術アイデアの実現に向けた構想を具現化して共同研究を提案する「ミッション研究」と展開します。昨年、試行した「フューチャーデザイン演習」には大学院生18人、ダイキン工業の若手社員8人が参加しました。開始前は論議が上手くかみ合うのかと危惧していましたが、初回からまったく違和感なく活発に進められ、時を経るにつれて対話は白熱し、期待をはるかに超える演習になりました。大学院生たちの何ものにもとらわれない着想と客観性のある若手社員の発想が実に上手くかみ合い、互いに協調しながら際立つ提案が生まれ、私たちも自信を得ることができました。

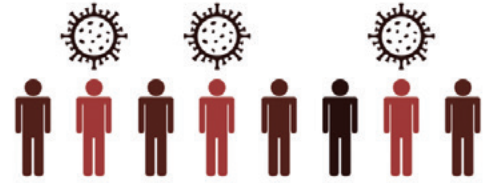
**後藤** 私たちが育成したいのは「0から1を



創り出す人材」です。日本人は「10を12、13…と高めていく」のは得意ですが、無から有を生み出せる人は稀です。例えば、教科書にない現象が起きた時に、それを的確に捉え、熟考する姿勢が重要なのです。次代に役立つ新たなものは、そこから生まれるからです。本コースでは、これを最大のテーマにしており、必ずできると考えています。「フューチャーデザイン演習」、さらに「ミッション研究」は、まさに「0から1を創り出す」領域です。また、本コースで生まれる貴重な教材、画期的な成果は「次の環境」研究マニュアルとして世界に発信していきます。それを手に取って読めば、その国の「次の環境」づくりの確かな指針になる。そのような価値ある手引書を創り出したいと願っています。

# COVID-19 Research Project

All Doshisha Research Model



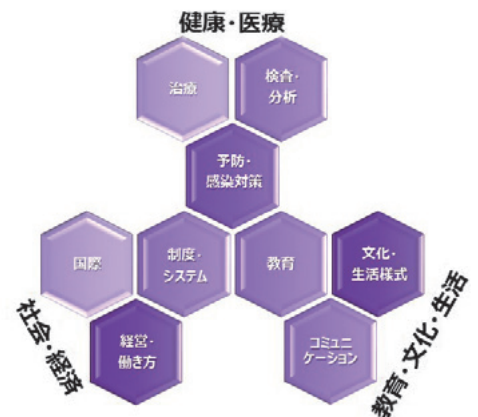
ポストコロナの新しい社会に向けて  
何を提言し、何を成すべきか  
What Should We Suggest and Achieve  
Toward the Post-COVID-19 Society?

## 新型コロナウイルス感染症に関する緊急研究課題 ALL DOSHISHAで挑む ポストコロナ社会への対応

2019年末、中国・武漢市で初めて確認された新型コロナウイルスは、2020年1月に日本国内で初めて感染者が確認された。世界各国でワクチン接種が始まり、収束にむけて期待がよせられるものの、医療体制や経済活動への不安は引続き大きい。この1年、世界中の人々があらゆる生活の場で「変化」に対応することが求められたことはいうまでもない。

同志社大学は、昨年7月に、COVID-19 Research Projectとして77課題の研究プロジェクトを立ち上げた。「All Doshisha Research Project」と位置づけ、「健康・医療」「社会・経済」「教育・文化・生活」3領域、「治療」「検査・分析」「予防・感染対策」「制度・システム」「経営・働き方」「国際」「教育」「文化・生活様式」「コミュニケーション」9分野からポストコロナ社会への対応に取り組んでいる。2021年度はこれらの研究成果を広く発信し、社会への貢献につなげていきたい。

同志社大学 COVID-19 Research Project  
<https://kikou.doshisha.ac.jp/reactivities/covid-19research.html>



\*は研究代表者

### 治療

新型コロナウイルス受容体の発現を抑制する物質の探索

\*三田 雄一郎(生命医科学部 助教)  
浦野 泰臣(生命医科学部 准教授)

新型コロナ感染時の嗅覚障害を引き起こす神経メカニズムの解明

\*櫻井 芳雄(脳科学研究科 教授)  
眞部 寛之(研究開発推進機構 准教授)

新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)スパイクタンパクの受容体結合部位を標的とした新規COVID-19治療薬の開発

\*高橋 美帆(生命医科学部 助教)

### 検査・分析

超音波とMRの同時撮像による新しい肺炎診断法の提案

\*秋山 いわき(生命医科学部 教授)  
超音波医学研究センター

情報技術を生かした新型コロナウイルス検査の効率化

\*程 俊(理工学部 教授)

偽陰性判定の低減と利便性の高さを特長とした小型PCRデバイス創製のための基盤研究

\*橋本 雅彦(理工学部 教授)

新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の高感度プロトタイプ解析

\*池川 雅哉(生命医科学部 教授)  
角田 伸一(生命医科学部 助教)

共非線形性分析手法による新型コロナウイルスの影響要因分析

\*大崎 美穂(理工学部 教授)

自立高齢者におけるCOVID-19抗体保有状況と身体機能との関連:有隣研究

\*米井 嘉一(生命医科学部 教授)

八木 雅之(生命医科学部 チェア・プロフェッサー教授)

### 糖化ストレス研究センター

新型コロナウイルス感染症対応における日独比較のデータサイエンスの実証研究

\*鄭 羅軍(文化情報学部 教授)  
吉野 諒三(文化情報学部 教授)

### 予防・感染対策

SNSにおけるインフォデミック抑制に関する研究

\*波多野 賢治(文化情報学部 教授)

ポリマーブラシのコンフォメーション変化を利用した抗ウイルス性表面の開発

\*東 信行(理工学部 教授)

強力な抗菌性を有する酸化チタン・酸化亜鉛複合粉体の開発

\*廣田 健(理工学部 教授)

加藤 将樹(理工学部 教授)

小学校・保育園の臨時休業等が働く親に及ぼした経済的・心理的影響

\*川口 章(政策学部 教授)

汎用フィルム・繊維材料の抗ウイルス化を実現する新規コーティング剤の開発

\*古賀 智之(理工学部 教授)

新型コロナウイルス対策の有効性認知に関する公衆・専門家間比較

\*中谷内 一也(心理学部 教授)

自治体の情報発信と予防行動

\*野田 遊(政策学部 教授)

COVID-19対策における専門家会議と政府のサイエンスコミュニケーション

\*野口 範子(生命医科学部 教授)

新型コロナウイルス感染症をめぐる主要メディアの報道に関する研究

\*小黒 純(社会学部 教授)

伊藤 高史(社会学部 教授)

ベプチドワクチンの有効な投与方法の検討

### \*田原 義朗(理工学部 准教授)

### 制度・システム

パンデミック対策に伴う公共交通・観光への影響と今後のあり方について

\*青木 真美(商学部 教授)  
安達 晃史(商学部 助教)

物理的接触を排除した事業活動の進展とそれに向けた法的課題の検討

\*松津 浩司(法学部 教授)

持続可能な地域経済に向けた共創コミュニティの再考

\*服部 篤子(政策学部 教授)

ポスト・コロナ時代の紛争解決手段における基本原理の変容とその課題

\*川崎 四郎(法学部 教授)

定常状態の経済への移行過程に関する基礎研究

\*三保 学(経済学部 教授)

ポストコロナ時代における企業間電子商取引(B2B e-Commerce)の新たな実務形成と法的問題について

\*長沼 健(商学部 教授)

高杉 直(法学部 教授)

新型コロナウイルス感染症に関する危機管理政策の課題

\*新川 達郎(政策学部 教授)

風間 規男(政策学部 教授)

公衆衛生・保健機構をSocial Capitalとした、新たな創造的地域・都市そして福祉社会の軌跡と展開—経済思想における「都市社会政策」の実践と福祉社会機能の創造—

\*西岡 幹雄(経済学部 教授)

笠井 高人(経済学部 准教授)

創造的人口減少を可能にするまちづくり生態系モデルの構築—withコロナ時代における地域自律と人口分散に向けた処方箋—

\*佐野 淳也(政策学部 准教授)

### 今里 滋(政策学部 教授)

電子署名の法的問題

\*高橋 宏司(司法研究科 教授)

新型コロナウイルス感染症への契約法的対応の比較法的研究

\*上田 誠一郎(法学部 教授)

エコリカル・フットプリントを用いたポストコロナ時代の生活様式シナリオの環境影響評価

\*和田 喜彦(経済学部 教授)

岸 基史(経済学部 准教授)

COVID19以降の世界におけるSDGsの新たな展開

\*八木 匡(経済学部 教授)

ライフリスク研究センター

コロナパンデミックに対する迅速な医療対応体制の構築に関する研究

\*股 勇(ビジネス研究科 教授)

### 経営・働き方

コロナ危機における働き方の変化と対応:全国大企業調査と京都市中小企業調査の比較

\*藤本 昌代(社会学部 教授)

働き方と科学技術研究センター

Assessing the impact of Covid-19 on the travel intention and behavior of domestic tourists in Japan

\*HANDLER, Isabell(ビジネス研究科 准教授)

テレワークの浸透は人と仕事の管理をどう変えるか?

\*樋口 純平(社会学部 准教授)

ポストコロナにおける日本企業がとるべき経営戦略—リーマン危機後の日本企業の主たる経営戦略遂行、実績の考察を踏まえて—

\*沖 勝登志(ビジネス研究科 チェア・プロフェッサー教授)

ポストコロナの組織改革に関する定量的・定性的



# オンライン会議における視線一致性を高める映像収録表示技術の開発

片桐 滋 (理工学部 情報システムデザイン学科 教授)

「目を合わせる」こと、即ち「視線の一致」は、対面者どうしの信頼性醸成に重要な役割を果たすなど、豊かなコミュニケーションに不可欠な要素である。しかし、ほとんどの計算機・ネットワークを用いるオンラインコミュニケーションにおいては、図1に示すようにディスプレイ上部に設置されたカメラを用いて映像収録が行われるため、カメラの前に位置する人物映像(図1両端)は、ネットワーク伝送を経た遠隔地におけるディスプレイ内には下向きの映像として表示される(図1中央)。明らかに、「目を合わせる」ことは困難である。

「目を合わせる」ためには、ディスプレイ内の至る所に目を持つ必要がある。しかし、現実にはそうした目を作ることは難しい。そこで、ディスプレイ内あるいはディスプレイとディスプレイとの間にカメラを埋め込む、新しいカメラアレイ埋め込み型ディスプレイと、その複数カメラ映像を用いて、自然な視線一致を実現する映像合成表示技術の実現を目指した(図2)。提案手法は、1) 個々のカメラを用いるカメラ前の人物位置の検出と人物の撮影、2) 隣接ディスプレイにまたがる人物の撮影、3) 隣接カメラ映像を用いた人物映像の回転、4) 合成人物映像のディスプレイ上における表示の技術等から成る。

効果を検証するため、1) カメラをディスプレイ内に貼り付けた、カメラアレイ埋め込み型ディスプレイ装置を作成し、2) ディスプレイ前の人物位置を制約した、実現が比較的容易な条件下における提案手法の実装と評価等を実施した。

本手法により、「目を合わせる」技術の一層の完成を試み、ディスプレイを経由した豊かなコミュニケーションや、生産性の高い遠隔コラボレーションを実現する技術として貢献することを目指している。

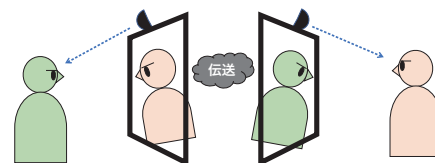


図1. ディスプレイ上部に設置されたカメラを用いた映像収録。



図2. カメラアレイ埋め込み型ディスプレイ(左)と実際に作成したディスプレイ上のカメラの例(右:直径1cm)。

|                                                                                                                                        |                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                    |                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>研究</p> <p>*太田 肇(政策学部 教授)</p>                                                                                                        | <p>*内藤 正典(グローバル・スタディーズ研究科 教授)</p> <p>ヒューマン・ディグニティ研究センター</p>                                                                                  | <p>*村上 紗央里(研究開発推進機構 助手)</p>                                                                                                                                        | <p>感染症対策下における国民のスポーツ観戦需要に関する研究</p>                                                     |
| <p>ウィズコロナ時代における中小企業の企業家行動にかんする研究</p> <p>*関 智宏(商学部 教授)</p>                                                                              | <p>火葬か土葬かーコロナ時代における疫学的公共善と宗教的自由の両立</p> <p>*中西 久枝(グローバル・スタディーズ研究科 教授)</p> <p>西川 由紀子(グローバル・スタディーズ研究科 教授)</p> <p>COHEN, Ada Taggar (神学部 教授)</p> | <p>ポストコロナ社会で「誰一人取り残さない」ためのアクセシビリティを考える</p> <p>*阪田 真己子(文化情報学部 教授)</p> <p>梶山 玉香(法学部 教授)</p>                                                                          | <p>*庄子 博人(スポーツ健康科学部 准教授)</p> <p>スポーツマネジメント研究センター</p>                                   |
| <p>Value-focused Decision Model for Sustainable Business Management</p> <p>*須貝 フィリップ(ビジネス研究科 教授)</p>                                   | <p>地域協力機関のCOVID-19に対する対策とポスト・コロナにおける国際協力のあり方について</p> <p>*UYAR, Aysun(グローバル地域文化学部 准教授)</p>                                                    | <p>ソーシャル・ディスタンスを保つ運動遊び</p> <p>*田附 俊一(スポーツ健康科学部 教授)</p>                                                                                                             | <p>自宅にて実施する自重を利用した筋力トレーニングにおける筋内低酸素化とトレーニング効果との関係</p>                                  |
| <p>COVID-19時代の新しいコーポレート・リスク・ガバナンスのあり方に係る行動経済学的分析</p> <p>*田口 聡志(商学部 教授)</p> <p>山本達司(商学部 教授)</p>                                         | <p><b>教育</b></p>                                                                                                                             | <p>オンライン教育におけるオフライン・コミュニケーション</p> <p>*鶴岡 孝造(社会学部 教授)</p>                                                                                                           | <p>アフターコロナ時代における価値観変化とデジタル・コミュニケーション</p> <p>*高橋 広行(商学部 教授)</p> <p>佐藤 研一(商学部 准教授)</p>   |
| <p>コロナ禍におけるリモートワークによる職場・仕事マネジメントの変化と組織・従業員への影響についての研究</p> <p>*田中 秀樹(政策学部 准教授)</p>                                                      | <p>コンピュータ・ロボット支援言語学習のオンライン環境における効果測定</p> <p>*加藤 恒夫(理工学部 准教授)</p> <p>田村 晃裕(理工学部 准教授)</p>                                                      | <p>オンライン教育でキャンパスの国際化をどう進展させるか?</p> <p>*山田 礼子(社会学部 教授)</p> <p>STEVENSON, William R. (社会学部 准教授)</p> <p>奥井 遼(社会学部 助教)</p> <p>崔 紗華(社会学部 助教)</p>                        | <p>シリコンコンサートホールによるリモート演奏会支援ツールの開発</p> <p>*土屋 隆生(理工学部 教授)</p>                           |
| <p>曖昧性下におけるリアルオプション・アプローチを用いた事業価値評価モデルの開発</p> <p>*辻村 元男(商学部 教授)</p>                                                                    | <p>児童青年の精神症状に対する COVID-19 の影響に関する縦断的研究</p> <p>*岸田 広平(研究開発推進機構 助教)</p> <p>石川 信一(心理学部 教授)</p>                                                  | <p><b>文化・生活様式</b></p>                                                                                                                                              | <p><b>コミュニケーション</b></p> <p>「自分と他者の顔の認識」が非対面コミュニケーションに及ぼす影響</p> <p>*藤村 友美(心理学部 准教授)</p> |
| <p>ポストコロナ時代に求められる共創価値創出への行動変容</p> <p>*瓜生原 葉子(商学部 准教授)</p>                                                                              | <p>パンデミック時代における良心ー世界観を更新するための学際的研究</p> <p>*小原 克博(神学部 教授)</p> <p>良心学研究センター</p>                                                                | <p>Project DIVOC 91: A Multiple-view Pilot Study Investigating "Total Leadership" Best Practices Post-COVID 19 in Japan</p> <p>*BYOSIERE, Philippe(ビジネス研究科 教授)</p> | <p>Blockchain技術を用いた高信頼・高セキュア情報システムの研究</p> <p>*芳賀 博英(理工学部 教授)</p>                       |
| <p>Market Category Formation Studies</p> <p>*山内 雄気(商学部 准教授)</p>                                                                        | <p>遠隔プログラミング演習における自動フィードバックシステムの提案</p> <p>*横原 絵里奈(理工学部 助教)</p> <p>小野 景子(理工学部 准教授)</p>                                                        | <p>新型コロナウイルス感染拡大が京都市における地域在住高齢者の健康づくりに及ぼした影響</p> <p>*石井 好二郎(スポーツ健康科学部 教授)</p> <p>スポーツ医科学研究センター</p>                                                                 | <p>オンライン会議における視線一致性を高める映像収録表示技術の開発</p> <p>*片桐 滋(理工学部 教授)</p>                           |
| <p><b>国際</b></p> <p>留学生の見たコロナ禍の日本:人種差別、テレワークと国際化、多言語感染予防行動推進アプリ、清浄と癒しの日本文化・芸術の理解</p> <p>*飯塚 まり(ビジネス研究科 教授)</p> <p>Well-being研究センター</p> | <p>パンデミック下のフィールドワーク方法論</p> <p>*森 千香子(社会学部 教授)</p> <p>板垣 竜太(社会学部 教授)</p>                                                                      | <p>音楽産業の転換における人々の行動様式の横断的研究</p> <p>*河瀬 彰宏(文化情報学部 助教)</p>                                                                                                           | <p>多対多オンラインコミュニケーションツールの研究開発</p> <p>*木村 共孝(理工学部 准教授)</p>                               |
| <p>コロナウイルス流行により生じる世界のアジア人・アジア系に対するヘイトに関する調査研究</p> <p>*和泉 真澄(グローバル地域文化学部 教授)</p>                                                        | <p>ポスト=パンデミックの国際都市史についてのオンラインアーカイブ構築</p> <p>*向 正樹(グローバル地域文化学部 准教授)</p> <p>堀井 優(文学部 教授)</p>                                                   | <p>[With コロナ]を見据えた新たな文化政策と文化活動のあり方に関する研究</p> <p>*河島 伸子(経済学部 教授)</p> <p>創造経済研究センター</p>                                                                              | <p>ビデオコミュニケーションにおける身体性の考察</p> <p>*大久保 雅史(理工学部 教授)</p>                                  |
| <p>イスラーム世界における新型コロナ感染症に対するレジリエンスの研究</p>                                                                                                | <p>ポストコロナの「市民」をどう考えるかーパブリックマインドの育成に関する実践研究</p>                                                                                               | <p>オンラインによる新たな伝統文化継承の方法開拓に関する研究</p> <p>*佐伯 順子(社会学部 教授)</p> <p>京都と茶文化研究センター</p>                                                                                     | <p>ネットワーク仮想化に基づく効率的な接続・伝送方式の検討</p> <p>*佐藤 健哉(理工学部 教授)</p>                              |



## 身体をテーマとした研究を通じて「なんとかする力」を身に付ける



さかた まみこ  
**阪田 真己子 研究室**  
文化情報学部教授

私のゼミでは、身体をキーワードとして4つのジャンルの中から卒業研究のテーマを選んでもらいます。1つは人と人との相互行為（インタラクション）における「身体」の役割を解明する「インタラクション系」、2つ目は認知の身体化現象およびそのメカニズムを解明する「身体化認知系」、3つ目は文化によって規定される身体の様相を解明する「身体文化系」、そして4つ目は、パフォーマンスやわざの獲得・習熟・継承メカニズムを解明する「芸能・パフォーマンス系」です。

ゼミ生には、「文化情報学部での学びの集大成として、チャレンジングな研究をしてほしい」と話しています。例えば、プロの漫才師やシンガーソングライターを大学にお呼びして公開ライブ実験を実施したり、グループワークにおける適正人数を調べるために2人、3人、4人、5人で某大型家具店の家具を組み立ててもらった実験をしたり、それはそれは大がかりな研究をたくさん実施してきました。

自分が抱いた素朴な疑問をどのようにすれば「学術的な問い」へと昇華できるのか、そしてその問いをどのようにデザインすれば実証的に解明できるのかを、まずは「自分で考える」ように突き放します。

これまでの人生では誰かが何とかしてくれたかもしれませんが、大学を卒業するまでに、「自分でなんとかする力」を身に付けてもらいたいと考えているからです。面白いことに、ゼミ生からの「うまくいきません」とか「どうすればいいでしょう」というメールを放置していると、そのうち「こうすればうまくいきました」と報告が来ますし、時には、私なんかがアドバイスするよりもユニークで斬新なソリューションを提案してくることも少なくありません。なかなか本人に言うてあげることは少ないのですが、心の中では「やるなあ」と感心しています。

じっくりじっくり考えに考え抜いて煮詰まったときに、「これ、よく考えたらめっちゃめっちゃ面白いやん！」と思わずひらめいた瞬間の喜びを学生には味わってほしいと思っています。そして、社会に出て「なんとかする力」でしなやかに荒波を乗り越えてほしいと願っています。



## 「グローバルな日本語」を目指して、外国人留学生が「生きた日本語」に光を当てる



す どう じゅん  
**須藤 潤ゼミ**  
グローバル・コミュニケーション学部  
准教授

グローバル・コミュニケーション学部の日本語コースには、外国人留学生のみで構成されたゼミが3つあります。いずれも、卒業に向けて研究を行い、日本語で論文を執筆することがミッションです。私達の学部の留学生の多くは、外国語としての日本語力を測る「日本語能力試験」の最も高いレベルの日本語力を持って入学します。しかし、ゼミに所属するためには、それだけではもちろん不十分で、日本語や日本社会に関する様々な側面について、留学生自身の母語や母文化と対照しながら、専門的かつ実践的に学べるようになることが求められています。

私はそのうちの1つのゼミで、主に日本語の話しことばをターゲットに、研究指導に当たっています。ゼミでは、日常のコミュニケーションでの失敗や悩みなどを共有することが多く、そこで、研究テーマに出会うことがよくあります。例えば、人間関係の構築・維持の役割も果たす雑談については、流暢に話せる留学生でも、新しい話題がうまく導入できない、あるいは、相手の話を聞いてもうまく反応できず、関係がぎくしゃくするといったエピソードをよく聞きます。雑談に関する研究論文を片手に、あらゆる雑談を録音し、その要因を分析しているゼミ生

もいます。

また、よりミクロなところでは、単語のアクセント。「サーファー」という単語はサだけ高く発音するのが本来のアクセントですが、特にサーフィンの愛好家や専門家は、なぜかこの単語を同じ高さで平らに発音しがちです。このように愛好家・専門家である自分と他を発音で区別するような現象は身の回りの「生きた日本語」にも多く見られ、それも格好の研究対象です。しかし、声の高さは、日本語が母語でも、意識しないとなかなか気づきません。ですから、日本語のアクセント型の枠組みを身につけ、微妙な声の高低は音響分析ソフトを駆使して、発音を観察しているゼミ生もいます。

このような日本語は、母語とする人にとっては普段無意識な現象ばかりですが、日本語を学ぶ人々は時にそこで悩み、傷つきます。ゼミ生には、論文執筆を通して、ことばの奥深さを探求するとともに、自らのエピソードを日本社会で発信し、多様な人々が日本で共に幸せに暮らすための「グローバルな日本語」を日本人とともに築いていってほしいと思います。





## ひとつの要因で納得するのではなく、他の要因も探し出してみよう



えち ご や あきら  
**越後屋 朗ゼミ**

神学部教授

私の専門はヘブライ語聖書学（旧約聖書学）です。ヘブライ語聖書の成立過程を、他の文献や考古学的資料などを用いながら、解明することが研究テーマです。

この演習科目では、ヘブライ語聖書原典を受講者とじっくり読んでいきたいのですが、なかなかそうはいきません。シラバスにそう書いたなら、登録者は限りなくゼロに近づくでしょう。ヘブライ語聖書原典を読むために必要な聖書ヘブライ語をまず学んでみようとする学生が非常に少ないのです。

というわけで、この演習科目は、聖書と関係するテーマであれば何でもOKというゆるゆるのスタンスでやっています。まったく関係ないようなテーマで発表する学生もいますが、結局はどこかで聖書とつながります。あら不思議！まったく関係なさそうでも、完全に別ものというわけではないようです。

授業の中でいつも口にするのは、原因があって結果は生じるけれど、結果があってそこから原因について考え始められるということ。そして、要因はひとつだけではないということ。人はひとつの要因で納得するようにできているらしいので要注意です。そこから思い込みが生じます。多様な要因が複雑に絡

み合っているのであって、ひとつだけに限定せずに、これまで気付くことのなかった要因を探し出すように、と繰り返しています。

受講した学生の感想です。「研究発表までの過程では、テーマ決めや資料文献を探し読み進めるなど、常に自分自身で自由に考え選択し続けることで、時間はかかるがとても有意義に研究を進めることができる」「他のゼミ生の発表もオリジナリティにあふれ、その後の質疑応答や先生の話もいつも展開が面白い」「ゼミを通して、文章を一から書き、論理的に組み立てる力や、他の方の文章を批判的な視点を持って読んでいく力を養うことができています」科目担当者が頼んだものなので、少し割り引いた方がよいでしょう。

最初に伝えるべきだったのかもしれませんが、神学部には他学部のようなゼミはありません。複数の演習科目を登録できるので、空いた時間を埋めるため、この科目を取りましたという学生もいます。あまり関心・興味のない世界をのぞくことで、思いがけない出会い・発見があるかもしれませんので、それはそれでよいことだろうと思っています。



## 取材し、書いて、作って、発信して。実践を重ねて“メディア人”を目指す



お ぐ ろ じゅん  
**小黒 純ゼミ**

社会学部教授

楽しくなければゼミじゃない。そう思い、ゼミ生と日々、向き合っています。たとえ、コロナ禍でZoomを介して、となったとしても。

3・4回生のゼミは「ジャーナリストなどメディア人を目指す人が集う場」を標榜しています。座学だけではジャーナリストにはなれません。〈ズブの素人〉のままメディア企業に就職しても通用しない時代です。「超実践的プログラム」にどっぷり浸かる。学外に出かけ、社会を見つめ、人と会い、話を聞き、ニュース記事や映像の形にする。こうした実践を重ねてこそ、メディアの特性を理解し、最低限のスキルや教養を身につけることができると考えています。

2020年度はコロナ禍でゼミの環境も激変しました。「集ってワイワイ」という機会が失われました。例えば、毎週、教室でグループに分かれ、顔と顔を付き合せて意見交換するという醍醐味は味わえません。数人がPCモニターを囲んで、映像の編集作業をする過程も踏めません。

それでも、できるだけことはやってみようと。例えば、映像取材に必要な三脚やレフ板（反射板）などは、Amazonで注文し、ゼミ生全員の自宅に直送しました。自宅での撮影では、室内のレイアウトを

描いて、カメラ（スマホ）をセットした三脚の置き場所や撮影の方向などを確認しました。これまでは「ほんの少し近づいて」などと、現場に居合わせたら一瞬で済んでいたのですが。

「いつもつながっている感覚」を維持するために、夏休みもZoomでのゼミを2週に一度は開講。N高の例にならい「オンライン自習室」も。秋学期に3回生は、紙媒体、映像、音声などの作品を、異なる小グループで3回制作しました。

4回生の中心は卒論です。個別面談は研究室からZoomに切り替わったことで、大幅に頻度が増しました。「きょう時間ありますか？」とLINEで連絡が入り…。夜10時を過ぎることもしばしば。自ずと研究の質は向上しました。リトリートでの合宿は断念しましたが、広い教室を丸2日間貸し切り、食事付きの「日帰り卒論合宿」を敢行しました。

目下の課題は、恒例のスキー・スノーボ合宿をどう実現するか。Zoomでは無理？

# 2021年度 予算編成方針について

2021年度予算編成方針は、法人の予算編成方針に基づき、  
2020年10月8日の大学予算委員会および大学評議会で審議のうえ決定されました。  
この方針に基づき予算編成を行い、一層の教育研究環境の維持・充実を進めてまいります。  
なお、予算の詳細については次号に掲載予定です。

それぞれの高等教育機関は、2040年頃の社会変化を想起しながら、世界が直面する課題の解決に対して、知識を基盤としていかに貢献できるか、この間頭を巡らせているが、新型コロナウイルス感染症拡大は、社会全体において優先的に取り組む課題を一変させる事態を生み出した。対面授業からネット配信授業への切り替えに象徴される通り、世界中の大学においては、教育方法はもとより学校運営そのものの見直しを余儀なくされる状況で、学生もまた、学びに対する考え方、価値観の変更を迫られている。本学は、いわゆるウィズコロナ時代における大学教育のあり方を見据えながら、創立者の意思を受け継いで良心教育を実践し、社会で活躍する人物を世に送り出し続けなければならない。

私立学校法の改正により、「同志社大学 VISION 2025－躍動する同志社大学－」（以下「ビジョン」という。）及びその中期行動計画は、法人としての中期的な事業計画の主軸となり、法人及び大学の中長期財政計画との関わりも一層強まっている。創立150周年が近づく中、これまでの成果や進捗状況を踏まえ改訂している中期行動計画と、年度ごとに進める事業との関連性をより強く意識し、本年度の予算編成を進める。

教学面では、ネット配信授業を円滑に行うことができるよう、2020年度は緊急対応として可能な範囲での情報環境整備を行ったが、今般のコロナ禍が起爆剤となる形で社会生活の様々な場面でICT活用が急速に進展する状況に遅れを取ることなく、計画的な情報環境整備に本格的に取り組む必要がある。また、ALL DOSHISHA教育推進プログラムやEUキャンパス、「組織」対「組織」の連携スキームによる共同研究の推進等、この間進めてきた取り組みでは、これまでとは異なる社会環境下においても効果的に事業を推進できるよう、工夫を重ねなければならない。

教育研究環境の面では、新学生寮の供用を開始し、寧静館及び育真館改築等工事を計画的に進める。また、教学施設設備及び研究装置設備の整備に係る第2号基本金を着実に組入れ、さらに新図書館建設や耐震化計画、京田辺キャンパスの教学施設設備の改善についての構想を進める。学生支援の面では、同志社大学奨学金の特別枠及び同志社大学大学院奨学金の特別採用について、新型コロナウイルス感染拡大に伴う経済情勢変動の状況も見定め、一定範囲で継続する。大学運営の面では、全学的にダイバーシティ推進に取り組むほか、より効率的な業務遂行の観点からの情報環境整備にも取り組む。

収入面では、学生生徒等納付金について、学部では本年度を含む過去4年間の推移も見ながら、入学定員通りの入学者数を見込み、安定的な財源を確保する。また、入学志願者の安定的確保や補助金、寄付金、受託事業収入など外部資金の増収について、引き続き積極的に取り組んでいく。

支出面では、人件費は新規採用を含む所要額を計上するが、人材派遣や業務委託に係る経費も含めた、いわゆる総人件費は原則として前年度予算の範囲内とする。また、物件費については、重点事業項目を含め、全体として抑制を図る。さらに、教育研究費については、教育環境改善予算及び国際化戦略特別経費予算の計上方法を見直すほか、繰越予算については具体的な事業実施計画に基づく効果的な執行を推進する。

なお、ビジョンにおいて目標に掲げている収支均衡予算編成に向けては、とりわけ経常勘定における支出超過の改善は急務であり、教育研究環境の維持・充実に取り組むための財源については、学費支弁者の負担だけではなく、既存事業の見直し等、支出抑制により確保する必要がある。については、教育研究費に係る積算基準の一部、経常的経費及び維持運営費の一部に係る支出抑制策を強化するとともに、過年度の予算執行状況を精査し、予算の効率的活用を検証の上、予算を編成する。また、大規模建設事業については、中・長期的な施設設備整備計画に基づき、その他既存の施設設備の整備については、安全管理面において緊急性の高い事業を最優先としつつ、キャンパスの快適性にも配慮の上事業を厳選し予算を計上する。

以上の方針のもと、予算における計画性を重視し、安定的な収入確保としての定員通りの入学者数確保と限られた財源を効率的に配分することを大原則として2021年度予算を編成する。

財務部 経理課



# 同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金

平素は同志社大学の教育・研究活動および学生支援への取り組みに対してご理解を賜り誠にありがとうございます。本募金事業は、同志社大学が創立150周年を迎える2025年に向けて取り組むべき課題のうち、あらゆる面からの学生に対する経常的な支援の充実を目的に募集を行っているものです。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が経済にも及び、学費支弁者の経済的な状況の変化や、学生のアルバイト先が減少する等により、多くの学生にとって学生生活を続けることが困難な状況に陥りました。同志社大学においても例外ではなく、多くの学生が困難な状況に直面しております。

同志社大学では、学生に“退学”という選択をさせないために、既存の給付奨学金制度を活用し、緊急対応として新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた学生を対象とした特別枠を設定しました。特別枠も含め、国の「高等教育の修学支援新制度」の対象とならなかった学部学生に、大学院学生（博士前期・修士課程）を加えた330名に対して、1億3,945万円を奨学金として給付しました。その大部分は2020年度に本募金事業を通じて賜りました多くの皆様からのご寄付を活用させていただきました。結果として、現在においても多くの学生が安心して修学と生活を継続することができております。ご寄付を賜りました皆様には改めて御礼申し上げます。

「同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金」における「特定寄付奨学金」は、様々な理由によって経済的な支援が必要な学生を助けることに繋がります。特に、新型コロナウイルス感染症が経済に与えた影響は2021年度以降も続く見通しであり、今後も同志社大学の学生が安心して修学し、“一国の良心”として社会へ飛び立てるよう皆様からのご理解とあたたかいご支援をよろしくお願い申し上げます。

## 募金の実績

### VISION 2025の推進

- ①リーダー養成プログラムの運営支援
- ②グローバル化の促進支援
- ③高大接続プログラムの展開支援

### 奨学金給付

- ④特定寄付奨学金
- ⑤育英型奨学金

### 課外活動支援 ※大学の公認団体のみ

- ⑥体育会、スポーツ活動の充実資金
- ⑦文化系公認団体活動の充実資金

### 施設設備整備

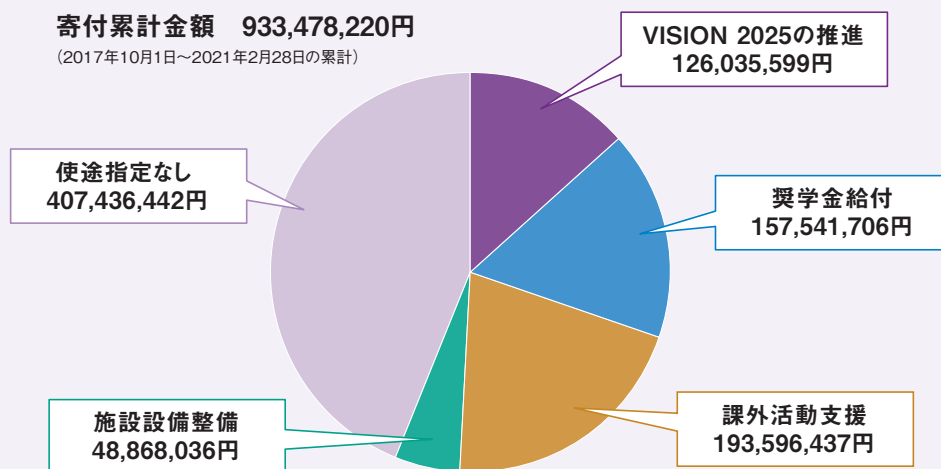
- ⑧今出川校地図書館
- ⑨新学生寮 ※募集は2020年度末まで

## 同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金

(単位：円)

寄付累計金額 933,478,220円

(2017年10月1日～2021年2月28日の累計)



## 同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金サイト

<https://bokin.doshisha.ed.jp/2025alldoshisha/>

または



ALL DOSHISHA 募金

検索



※法人、団体でのご寄付をご検討の場合や、海外からのご寄付、遺贈をご検討の場合は募金課までご連絡ください。

※ご寄付を賜りました皆様のご希望に沿って、寄付者芳名録への掲載や、一定額以上のご寄付を賜りました場合は、良心館に設置した寄付者銘板への掲載をしております。詳細は「ALL DOSHISHA 募金サイト」をご覧ください。

「同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金」では、卒業生、法人、団体、教職員の皆様を対象に在学生への支援をお願いしております。在学生御父母等の皆様からのご寄付につきましてもありがたく頂戴いたしますが、入学した年内の寄付金（入学願書受付の開始日から入学が予定される年の年末までの期間内に納入したもの）につきましては、所得税法第78条第2項にある「学校の入学に関する」寄付金に該当するとみなされ、寄付金控除（税制上の優遇措置）の対象から除外されますので、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先

同志社大学 学長室 募金課 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL：075-251-3230 FAX：075-251-3097 Email：ji-bokin@mail.doshisha.ac.jp



## 新任教員紹介

- ①所属
- ②職名
- ③主な担当科目



**三輪 地塩**  
(ミツ チシオ)  
①神学部  
②助教  
③日本キリスト教史1



**源 健一郎**  
(ミナモト ケンイチロウ)  
①文学部  
②教授  
③日本文学特殊講義(中世B)



**鬼田 崇作**  
(キダ シュンサク)  
①文学部  
②准教授  
③英語教育学



**斎藤 彩世**  
(サイトウ サヨ)  
①文学部  
②准教授  
③英語文化特論B(6)



**大山 和哉**  
(オオヤマ カズヤ)  
①文学部  
②助教  
③日本文学講読(近世C)



**水出 幸輝**  
(ミスイデ コウキ)  
①社会学部  
②助教  
③メディア社会論



**浅田 正彦**  
(アサダ マサヒコ)  
①法学部  
②教授  
③国際法総論II



**檜垣 伸次**  
(ヒガキ シンジ)  
①法学部  
②准教授  
③統治の原理II



**比嘉 義秀**  
(ヒガキ ヨシヒデ)  
①法学部  
②助教  
③西洋法史I



**池田 直人**  
(イケダ ナオト)  
①法学部  
②助教  
③刑法総論I



**保井 健呉**  
(ヤスイ ケンコ)  
①法学部  
②助教  
③国際社会と法



**後藤 倫子**  
(ゴドウ リンコ)  
①法学部  
②助教  
③リーガル・リサーチ



**陳 燕双**  
(チェン ヤンシュアン)  
①商学部  
②助教  
③ビジネス・トピックス



**亀井 大樹**  
(カメイ タイキ)  
①商学部  
②助教  
③ビジネス・トピックス



**的場 竜一**  
(マツバ リュウイチ)  
①商学部  
②助教  
③ビジネス・トピックス



**入江 容子**  
(イリエ ヨウコ)  
①政策学部  
②教授  
③行政組織論



**吉田 徹**  
(ヨシタ トオル)  
①政策学部  
②助教  
③比較政治学



**大和田 順子**  
(オウダ シュンコ)  
①政策学部  
②教授  
③NGO・NPO論



**小阪 真也**  
(オサカ シンヤ)  
①政策学部  
②助教  
③政策学入門



**中西 義典**  
(ナカニシ ヨシノリ)  
①文化情報学部  
②准教授  
③データサイエンス演習



**Gaetan RAPPO**  
(ガエタン ラッポ)  
①文化情報学部  
②准教授  
③歴史文化情報概説



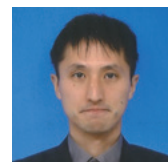
**飯尾 尊優**  
(イイノ タカマサ)  
①文化情報学部  
②准教授  
③コンピュータの仕組み



**土田 潤**  
(ツチダ ジュン)  
①文化情報学部  
②助教  
③プログラミング入門



**柴田 一成**  
(シバタ カズナリ)  
①理工学部  
②特別客員教授  
③数理環境科学特別講義1



**遠藤 太佳嗣**  
(エンドウ タカツグ)  
①理工学部  
②准教授  
③物理化学III



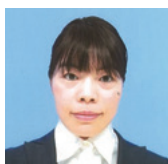
**太田 寛人**  
(オオタ ヒロト)  
①理工学部  
②助教  
③物理学I



**渡辺 政隆**  
(ワタナベ マサタカ)  
①生命医科学部  
②特別客員教授  
③分子生物学史特論I-II



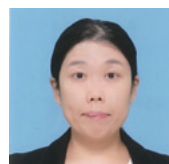
**築瀬 康**  
(ヤナセ コウ)  
①スポーツ健康科学部  
②助教  
③コンディショニング論



**西牧 未央**  
(ニシマキ ミオ)  
①スポーツ健康科学部  
②助教  
③助手



**UCHINO Crystal Kimi**  
(ウチノ クリスタル キミ)  
①グローバルコミュニケーション学部  
②助教  
③Intermediate Seminar 1



**立石 洋子**  
(タテishi ヨウコ)  
①グローバル地域文化学部  
②准教授  
③グローバル地域文化導入セミナー



**見原 礼子**  
(ミハラ レイコ)  
①グローバル地域文化学部  
②准教授  
③フランス語で読む地域文化研究2



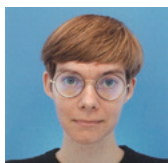
**James HEATHER**  
(ジェームズ ヘザー)  
①グローバル地域文化学部  
②准教授  
③コミュニケーション・イングリッシュ1



**正水 芳人**  
(マサミズ ヨシト)  
①脳科学研究科  
②教授  
③神経疾患と創薬



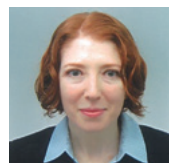
**笠原 宏**  
(カサハラ ヒロシ)  
①司法研究科  
②特別客員教授  
③経済法I



**Anya Clarissa BENSON**  
(アンヤクラリッサ ベンソン)  
①グローバル教育センター  
②准教授  
③Issues in Japanese Culture



**大工原 勇人**  
(タイクハラ ハヤト)  
①日本語・日本文化教育センター  
②准教授  
③日本語1(文章表現区)



**Jennifer MCGUIRE**  
(ジェニファー マグワイア)  
①国際教育インスティテュート  
②助教  
③Japanese Society and Culture



**河野 洋幸**  
(カワノ ヒロキ)  
①研究開発推進機構  
②助教

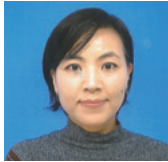


**上田 光明**  
(ウエタ ミツタカ)  
①高等研究教育院  
②准教授  
③Capacity Development for Coexistence and Cooperative Works





**小川 雄**  
(オカワ タケル)  
①文学部  
②助教  
③社会倫理学(1)



**朴 株顯**  
(パク スビョン)  
①文学研究科  
②助手



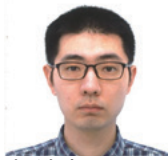
**益田 高成**  
(マスタ タカナリ)  
①法学部  
②助教  
③政治学入門



**二神 孝一**  
(フタガミ コウイチ)  
①経済学部  
②特別客員教授  
③国際マクロ経済学



**滝本 香菜子**  
(タキモト カナコ)  
①政策学部  
②助手



**朱 浩良**  
(シュ コウリョウ)  
①総合政策科学研究科  
②助手



**加堂 大輔**  
(カドウ ダイスケ)  
①理工学部  
②准教授  
③物理学基礎



**毛 斉悦**  
(モク サイエツ)  
①理工学研究科  
②助手



**PEREZ RIOBO Andres**  
(ペレス リオボ アンドレス)  
①グローバル地域文化学部  
②助教  
③スペイン語で読む地域文化研究1



**Tobias SCHICKHAUS**  
(トビアス シックハウス)  
①グローバル地域文化学部  
②助教  
③ドイツ語入門I

## 退職教員

2021年3月31日付で、次の先生方が退職されました。

### ■神学部

水谷 誠 教授

### ■文学部

藤井 光 教授

### ■文学研究科

POZZI Carlo Edoardo 助手

### ■社会学部

金子 邦秀 教授

### ■社会学研究科

鄭 熙聖 助手

### ■法学部

阿川 尚之 特別客員教授

尾形 健 教授

坂元 茂樹 教授

村田 陽 助教

奥田 菜津 助教

竹治 ふみ香 助教

### ■経済学部

大谷 実 助教

### ■商学部

青木 真美 教授

森田 雅憲 教授

鈴木 良始 教授

鈴木 智気 助教

安達 晃史 助教

章 胤杰 助教

趙 怡純 助教

### ■政策学部

今里 滋 教授

新川 達郎 教授

佐野 淳也 准教授

伊藤 理史 助教

北川 雄也 助手

### ■文化情報学部

杉本 裕二 教授

鋤柄 俊夫 教授

原 尚幸 教授

SONG Jaehyun 助教

### ■理工学部

廣田 健 教授

森 康維 教授

関 穰慶 准教授

### ■生命医科学部

石浦 章一 特別客員教授

### ■生命医科学研究科

MONIRUZZAMAN Mohammad 助手

### ■スポーツ健康科学部

渡邊 裕也 助教

### ■心理学部

白井 真理子 助教

### ■グローバル・コミュニケーション学部

Edward Ogle HEARN 助教

JONATHAN GOJON 助教

### ■グローバル地域文化学部

稲本 健二 教授

中井 敦子 教授

松本 賢一 教授

Felicity GREENLAND 准教授

### ■脳科学研究科

朴 洪宣 助手

### ■司法研究科

古江 頼隆 教授

Hans Peter MARUTSCHKE 教授

松山 隆英 教授

奥村 正雄 教授

### ■ビジネス研究科

藏本 一也 教授

### ■全学共通教養教育センター

内山 八郎 准教授

### ■日本語・日本文化教育センター

中井 好男 助教

### ■国際教育インスティテュート

Bruce WHITE 教授

### ■高等研究教育院

岡本 岳之 准教授

Iyas Salim ABU-HAJJAR 助教

### ■研究開発推進機構

森 靖典 准教授

平井 康治 助教

藤井 まい 助教

孟 憲巍 助教

永野 茜 助教

阿部 亮子 助教

中屋 昌子 助手

伊藤 雅隆 助手



## 2021年4月 同志社大学新島塾 第3期開塾



同志社大学では、良心教育を継承しながら、文系と理系の垣根を越え、総合知を備えた次の時代を担う人物を養成するための新しい教育プログラム「同志社大学新島塾」(以下「新島塾」)を2019年度に開塾いたしました。新島塾では、学生の皆さんの意欲と能力を在学中に可能な限り伸ばし、それぞれの学問分野の専門性を身につけるだけにとどまらず、リーダーシップとフォロワーシップを兼ね備えた人物の養成を目指しています。

いかに時代が移り変わろうとも、人に寄り添って真摯に意見を汲み取り、全体を見渡して、他者や組織を最善の方向に導くことができる人物は、多様性と寛容に満ちた豊かな社会を築く上で欠かせない存在です。

新島が「人を植ゆる」という言葉に託したもの、「人一人ハ大切ナリ」という言葉に込めたものが、新島塾にはあると信じています。

塾生の皆さんが互いの「良心」を信頼し合い、真剣で自由な、そして人格的な知的交流を重ねることで、互いに切磋琢磨できるものと大いに期待しています。

同志社大学新島塾 塾長(同志社大学 学長) 植木 朝子

## 入塾対象等

|      |                                                        |
|------|--------------------------------------------------------|
| 対象者  | 本学学部2年次生(出願・審査時は学部1年次生)                                |
| 入塾期間 | 学部2年次から始まる通算2年間                                        |
| 定員   | 25名(1学年につき)                                            |
| 修了証  | 2年間の在塾期間を終え、修了要件を満たした塾生には、学長(塾長)から「同志社大学新島塾修了証」を授与します。 |

## 特徴

|        |                                                                                                |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| POINT1 | <b>新島塾独自のプログラムが受講できます!</b><br>塾生しか学ぶことができないプログラムを提供します。少人数で講義を受け、レポート作成や討論を行い、切磋琢磨しながら学びます。    |
| POINT2 | <b>潜在力の顕在化に向けた基礎トレーニングです!</b><br>学びに対する意欲の高い学生の能力をより伸ばさせるため、厳しい指導の下、多くの課題をこなし、精神的にも負荷がかかる内容です。 |
| POINT3 | <b>各界のリーダーから直接学ぶことができます!</b><br>「リーダーに学ぶ徳力の涵養」(必修プログラム)では、各界のリーダーを招聘し、その思考や規範を直接学びます。          |

## プログラム

新島塾は、以下の「必修」プログラムと正課の授業、正課外活動によって構成されます。

## 新島塾 必修プログラム紹介

## 読書から始まる知の探求

担当教員が提示する課題図書を読み、指定された読書後の活動(書評の執筆、課題図書のテーマに関するディベートやフィールドワーク等)を通して取り上げられる問題を考察、探究し、幅広い教養や論理的思考力の獲得、社会的視野の拡大と意欲の醸成、豊かな感性を育みます。2020年度は、参考図書を含め11冊の課題図書が提示されました。塾生は、自身の学問分野とは異なる分野の書籍を読み、知識の増大はもとより、異なる学部で学ぶ塾生との議論を通じて、一つの事象には様々な価値観やものの見方・考え方があることを文字通り体感しました。

## 合宿で鍛える知的基礎体力

日常生活から離れた塾生と講師と時間・空間を共有して語り、仲間と協働する価値を学ぶことに集中します。専門分野に留まらない学知の必要性を思い知るとともに、複雑な社会情勢を読み解くための基礎力を培います。2020年度はコロナ禍の影響により、合宿形式を取りやめ、2日間の通学形式にて実施しました。「危機的状況下での学問—新型コロナウイルス禍を学問的な視点でどう捉えるか—」をテーマに、グループ発表や全体討議などを通して活発に学び合う2日間となりました。

## リーダーに学ぶ徳力の涵養

各界のリーダーを招き、設定したテーマに関して対話・討論し、人生の岐路となった経験、リーダーとして下した重大な決断、対面した危機や困難をどのように克服して乗り越えたか等を知り、その思考や規範からロールモデルを発見します。2020年度は、能楽師(河村晴久氏)をお招きし、「能に学ぶ日本の精神性」をテーマに、ご自身の経験を交えながら、能が持つ魅力や普遍性について講演をいただきました。講演後は植木塾長による進行の下で質疑応答が行われ、塾生からは積極的な質問が挙がるなど、貴重な学びの場となりました。

## 2020年度同志社大学新島塾 課題図書・参考図書一覧

| 書名                                                            | 著者                    |
|---------------------------------------------------------------|-----------------------|
| 「型」を学ぶ—レポートの作成—                                               | 新 茂之・吉川 杉生            |
| 地球に降り立つ 新気候体制を生き抜くための政治                                       | ブルーノ・ラトゥール            |
| 復興の空間経済学 人口減少時代の地域再生                                          | 藤田 昌久・浜口 伸明・亀山 嘉大     |
| 復興政策をめぐる「正」と「善」                                               | 鈴木 興太郎・須賀 晃一・河野 勝・金 慧 |
| 富山は日本のスウェーデン 変革する保守王国の謎を解く                                    | 井手 英策                 |
| チェンギング・ブルー 気候変動の謎に迫る                                          | 大河内 直彦                |
| The Discovery of Global Warming: Revised and Expanded Edition | Spencer R. Weart      |
| 職業としての学問                                                      | マックス・ウェーバー 著、尾高 邦雄 訳  |
| 風姿花伝・三道                                                       | 世阿弥 著、竹本 幹夫 訳注        |
| 論理哲学論考                                                        | ウィットゲンシュタイン 著、野矢 茂樹 訳 |
| ウィットゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む                                        | 野矢 茂樹                 |

新島塾オリジナルサイト  
(学びのかたちの新展開)

同志社大学新島塾

<https://next.doshisha.ac.jp/index.html>



Instagram 始めました  
@neesimajyuk\_official





# リベラル・アーツを受け継ぐ 「全学共通教養教育科目」

皆さんはリベラル・アーツという言葉をご存知ですか？新島襄が留学したアモスト大学は、今日でもアメリカのリベラル・アーツ・カレッジのトップ校です。リベラル・アーツは、日本では一般に「教養教育」と訳されますが、元来は「人間を自由にする学問」を意味しています。学問は人間を自由にするものでなくてはなりません。一つの専門分野を究めることは大切ですが、世界の豊かな多様性に目を向けず、内に閉じた狭い価値観に安住し束縛されているのは「リベラル」とは言えません。たえず自分自身からも自由でありながら、他者に対して自分を開き、柔軟で強靱な知的好奇心をもって、理系・文系を問わず、様々な領域への越境を繰り返し楽しむことが、リベラル・アーツの学びと言えます。

専門を超えた広い学問領域への「リベラル」な知的好奇心をもって学ぶ「全学共通教養教育科目」を提供しているのが全学共通教養教育センターです。刻々と変容する世界の中に、

「コロナ禍という未曾有の経験により、私たちはこれまでの考え方、価値観の変更を迫られています。また、社会にすでに存在していた諸問題が顕在化し、差別や不寛容、社会の分断など、倫理的な問題がより深刻になっていきます。これまでとは違う価値観のもとでこれまでとは違う未来のありかたを各自が模索し、人はいかに生きるべきかを真剣に考えなければならない今こそ、同志社大学の掲げる「良心教育」の真価が問われていると思っています。」

大学HP学長からのメッセージより抜粋

優れた国際感覚と豊かな教養を身に付け、「良心を手腕に運用する人物」を輩出できるよう、基本的な人文・社会・自然分野の教養教育科目の他に、建学の精神やキリスト教について学ぶ「同志社科目」、異なる文化的背景と価値観を持つ人々と協力し、国際社会で活躍するために必要な素養を身に付ける「国際教養科目」、社会との接点を中心に、ライフプランニングから働く意識の醸成や人生観の養成まで扱い、自治自立の精神を涵養する「キャリア形成支援科目」、文化・芸術を通して感性を磨き、クリエイティビティを高めて新たな価値の創出へと導く「クリエイティブ・ジャパン科目」など、多種多様な科目があります。

## 話題の科目①

### 日本経済新聞社との連携科目

㈱日本経済新聞社の現役記者を講師に迎え、両校地に「メガトレンドを読む」（2020年度～）と「SDGsで考える社会課題とキャリア形成」（2021年度～）を開講しています。

「メガトレンドを読む」では、国際政治、世界経済、人口・環境問題、産業構造、働き方など様々な分野から、世界と日本に今後起こりうる巨大な社会の変容（メガトレンド）について学び、それが新たなビジネスを生み出す点にも注目することで、「課題解決」にとどまらず、イノベーションの創出に必要な「課題を設定し、発見する力」をも養うことを目指します。

また、新設の「SDGsで考える社会課題とキャリア形成」では、今や社会課題解決の共通言語として意識され、人々の暮らしやビジネス、政治など、あらゆる社会活動に影響を与えつつある「持続可能な開発目標（SDGs）」の基本理念や導入の経緯を理解し、自身の専門性を活かした社会課題との係わり方を考え、その後の大学での学びにつなげることを目指します。

### 「メガトレンドを読む」受講生の声

「いわゆる「勉強」とは一味違う、我々の生活や将来に密接に関わる貴重な情報をたくさん得ることができた」、「講義の内容はほとんど知らなかったこと、考えたこともなかったことばかりで視野がとても広がった。大学だからこそ受けられる授業」、「現在起こっている重要な事柄を説明してくれて知識を増やしてくれ、また自分自身で調べ探究したくなる授業で楽しかった」

（授業評価アンケートより）

## 話題の科目②

### 新しいインターンシップの形「キャリア形成とインターンシップ」

コロナ禍を契機に、2021年度よりインターンシップをオンラインとするなど内容を大幅にリニューアルし、本来の教育目的インターンシップとして提供します。

採用活動、就職活動とは一線を画する本科目では、より早い段階からインターンシップを体験することを通じて自分自身のキャリアを展望し、課題に気づき、その解決に向けて今、何をしなければならないのかを学ぶことを目的とします。

※協力企業：水中ポンプ国内トップシェアを誇るB to Bの老舗企業（株）鶴見製作所、運輸業でありながらサービス業としてのホスピタリティや数々の困難な状況を打開してきた日本航空（株）、最先端のデジタルマーケティングを展開する（株）電通デジタル、の3社から2社のインターンシップが割り当てられる。

## 話題の科目③

### 京都科目 ～クリエイティブ伝統産業と文化イノベーション～

京都のクリエイティブな伝統産業が生み出す文化のイノベーションに焦点を当て、そのメカニズムとそれが経済やビジネスに与える影響を考察します。京都に位置する本学ならではの学びを、伝統産業や文化に関するフィールドワークやディスカッションをメインに体験していきます。

## 2022年度より外国語教育科目（英語）のカリキュラムを改編します。

### お知らせ

英語科目について、2022年度より新たなカリキュラム編成で提供します。具体的には右記4点について検討・充実がなされ、これまで以上に、個々の能力に応じた少人数教育が実現します。

- ① 体系的な科目構成
- ② 習熟度別クラス編成の拡充
- ③ 少人数クラスの実現
- ④ レベルに応じた科目の履修

※1・2年次生での8単位履修に変更はなし

詳しくは全学共通教養教育センターHPをご覧ください。  
<https://cgile.doshisha.ac.jp/>





## 本学教員の執筆図書紹介

(価格は税別)

### 新 世界の社会福祉 第10巻 中南米

宇佐見耕一 編 宇佐見耕一 他 著 旬報社

### マニフェスト・デスティニーの時空間

白川恵子 他 著 小島遊書房 3,000円

### 情報倫理 改訂新版

原田隆史 佐藤翔 他 著 技術評論社 1,380円

### イスラームからヨーロッパをみる

内藤正典 著 岩波書店 900円

### 世界哲学史 7

中川明才 他 著 筑摩書房 920円

### 「超」働き方改革

太田肇 著 筑摩書房 780円

### 図書館・図書館学の発展

佐藤翔 他 著 日本図書館研究会 4,500円

### 注釈 刑事訴訟法 第2巻 第3版

河村博 他 編著 立花書房 8,600円

### アメリカ憲法の群像 裁判官編

尾形健 他 著 尚学社 4,500円

### 中国伝道四五年

土肥歩 他 訳 平凡社 3,800円

### スコットランド文学の深層

金津和美 他 著 春風社 3,700円

### アメリカのホワイトカラー犯罪

川崎友巳 他 訳 成文堂 15,000円

### 無心のケア

中川吉晴 小野文生 他 著 晃洋書房 2,300円

### 集団認知行動療法の進め方

石川信一 他 著 培風館 2,800円

### 昭和史講義 戦後篇 下

村田晃嗣 他 著 筑摩書房 1,100円

### 森浩一古代学をつなぐ

浜中邦弘 他 著 新泉社 3,500円

### 不思議の国のロンドン

臼井雅美 著 PHPエディターズ・グループ 1,500円

### ソーシャルワークの哲学的基盤

空閑浩人 他 訳 明石書店 3,000円

### 大コメンタール刑法 第三版 第12巻

河村博 他 著 青林書院 11,500円

### コンテンツ産業論 第2版

河島伸子 著 ミネルヴァ書房 3,500円

### 分散型台帳テクノロジー

津田博史 監修 朝倉書店 3,600円

### はじめてのAI

土屋誠司 著 創元社 1,800円

### 憲法判例の射程 第2版

御幸聖樹 他 著 弘文堂 2,700円

### 新・公共経営論

服部篤子 他 編著 ミネルヴァ書房 2,800円

### 新時代のミュージアム

河島伸子 他 著 ミネルヴァ書房 3,800円

### DX時代の信頼と公共性

河島伸子 他 著 勁草書房 3,500円

### 「共に生きる」ための経済学

浜矩子 著 平凡社 820円

### 20世紀の東アジア史 Ⅲ各国史 2 東南アジア

鈴木絢女 他 著 東京大学出版会

### 生物群集を理解する

長谷川元洋 他 著 京都大学学術出版会 3,400円

### 新・コメンタール 民法(財産法) 第2版

上田誠一郎 梶山玉香 他 著 日本評論社 6,700円

### 商法判例集 第8版

山下友信 他 編 有斐閣 3,400円

### 改正債権法コメンタール

大中有信 荻野奈緒 佐久間毅 深谷格 他 著 法律文化社 7,000円

### 知的財産法の挑戦 Ⅱ

山根崇邦 他 著 弘文堂 5,400円

### コーパス研究の展望

長谷部陽一郎 他 著 開拓社 3,700円

### ポリティカル・サイエンス入門

飯田健 他 著 法律文化社 2,400円

### 日本大衆文化史

佐野明子 他 著 KADOKAWA 2,500円

### 日本語研究から生成文法理論へ

瀧田健介 他 著 開拓社 4,000円

### ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ

穂山洋子 他 著 勉誠出版 6,000円

### パワーズ運動生理学

若原卓 他 訳  
メディカル・サイエンス・インターナショナル 10,000円

### 大学発ベンチャー創出の エコシステム

BISHNU KUMAR ADHIKARY 他 著  
中央経済社 3,000円

### カルチャー・ミックスⅢ

清瀬みさを 編 清瀬みさを 他 著  
晃洋書房 2,900円

### 気候変動から読みなおす日本史 第3巻 先史・古代の気候と社会変化

若林邦彦 他 編 臨川書店 3,600円

### 法思想史を読み解く

戒能通弘 他 著 法律文化社 2,900円

### 幻想と怪奇の英文学Ⅳ 変幻自在編

下楠昌哉 他 責任編集 遠藤徹 大沼由布  
下楠昌哉 金谷益道 桐山恵子 他 著  
春風社 3,000円

### 正倉院宝物の輝き

中安真理 他 著 里文出版 3,400円

### 侮ってはならない中国

坂元茂樹 著 信山社 880円

### プロパガンダ戦争

内藤正典 著 集英社 880円

### 司法・犯罪心理学

毛利真弓 他 著 有斐閣 2,500円

### ハート対ドゥオーキン論争のコンテクスト

濱真一郎 著 成文堂 5,500円

### よくわかる福祉社会学

畑本裕介 他 著 ミネルヴァ書房 2,500円

### 持続可能な社会への道

和田元 他 著 日本学術協力財団 1,800円

### レクチャー法哲学

浅野有紀 他 著 法律文化社 3,200円

### キリスト教史の学び(下)

越川弘英 著 キリスト新聞社 2,200円

### 新・日本の会社法 第2版

川口恭弘 他 著 商事法務 3,700円

### ドイツ文化事典

穂山洋子 石井香江 服部伸 他 著  
丸善出版 20,000円

### JAXAの研究開発と評価

山谷清志 他 著 晃洋書房 1,200円

### ゼロからはじめる哲学対話

西山溪 他 著 ひつじ書房 2,200円

### ASEANにおける日系企業の ダイナミクス

上田曜子 他 編著 関智宏 他 著  
晃洋書房 3,000円

### 入門 埋蔵文化財と考古学

水ノ江和同 著 同成社 1,700円

### ボーダーを超えることばたち 21世紀イギリス詩人の群像

臼井雅美 著 PHPエディターズ・グループ 1,400円

### ケアするのは誰か?

岡野八代 訳 岡野八代 他 著 白澤社 1,700円

### 初心者のための機械製図 第5版

松村恵理子 他 著 森北出版 2,500円

### 数理モデル入門

齋藤誠慈 著 裳華房 2,400円

### つながるクルマ

佐藤健哉 他 編著 コロナ社 3,500円

### 教員の報酬制度と労使関係

岩月真也 著 明石書店 5,800円

### どうする日本の福祉政策

埋橋孝文 編 埋橋孝文 郭芳 廣野俊輔 他 著  
ミネルヴァ書房 3,000円

### よくわかる児童文化

竹内長武 他 著 ミネルヴァ書房 2,600円

### 中東・オリエント文化事典

勝又悦子 森山央朗 他 著 丸善出版 20,000円

### 論究会社法

船津浩司 他 著 有斐閣 3,900円

### 民事訴訟の簡易救済法理

川嶋四郎 著 弘文堂 6,000円

### 存在と力

服部敬弘 他 訳 萌書房 3,600円

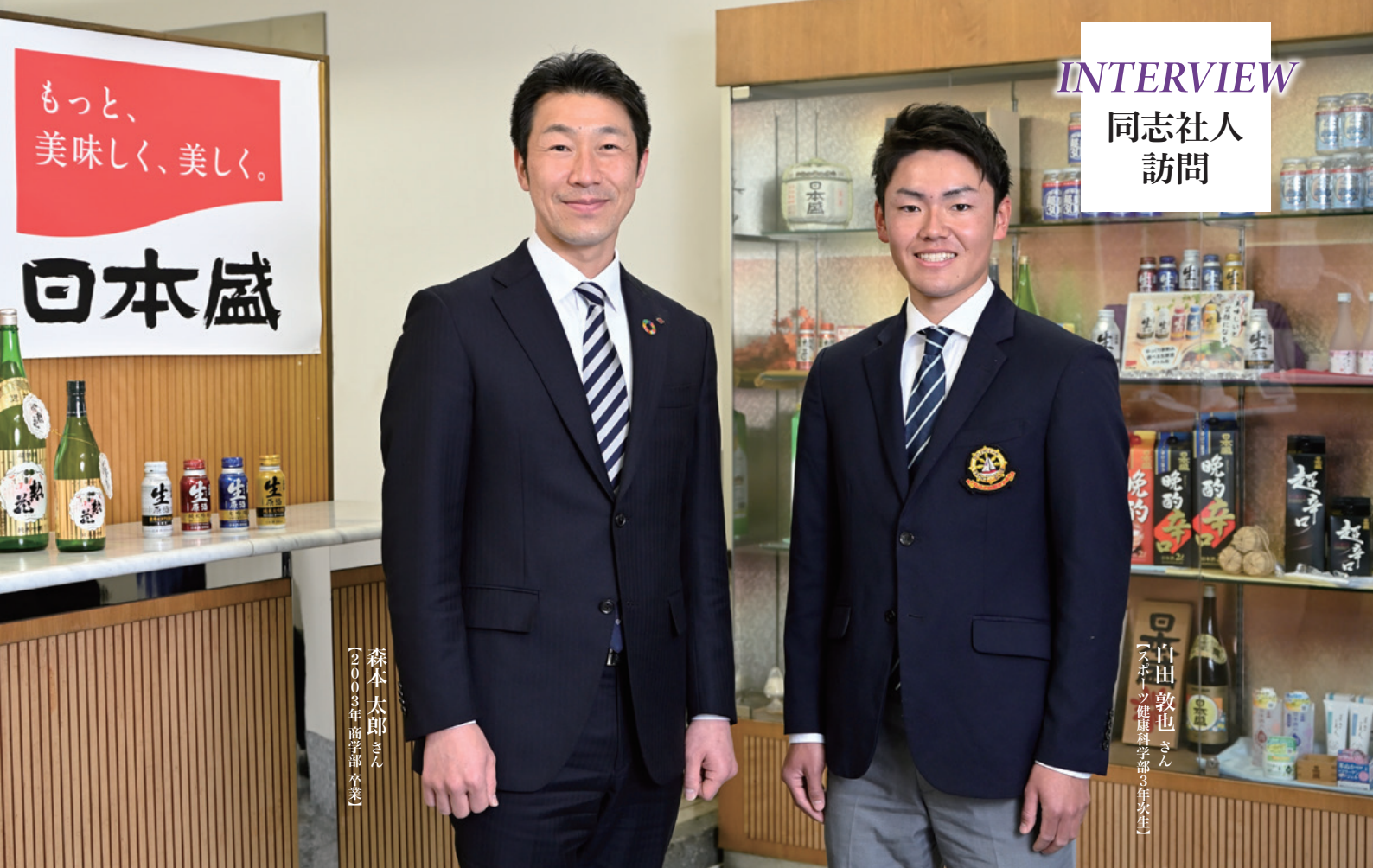
### 日本中世の政治と制度

山田徹 他 著 吉川弘文館 11,000円

### 性犯罪規定の比較法研究

川崎友巳 他 著 成文堂 15,000円





森本 太郎さん  
〔2003年 商学部 卒業〕

白田 敦也さん  
〔スポーツ健康科学部3年次生〕

日本盛株式会社 代表取締役社長

# 森本 太郎さんに聞く

住友商事を退職し、ヨット競技に全力を注ぎ、北京五輪セーリングで7位入賞。  
現在、日本盛のトップとして次代を切り拓く森本太郎さんに  
同志社大学ヨット部の後輩である白田敦也さんがインタビューしました。

## 「業界初」への果敢な取り組みは 受け継ぐチャレンジ精神の証

**白田** 社長に就任された時、どのような心境でしたか？

**森本** 昨年6月、コロナ禍の逆風が吹き荒れる中で社長に就任しました。先行きがまったく読めない状況でしたが、私は逆に良いタイミングでバトンを引き継いだと思いました。これほど強烈な外からのインパクトがあれば、社員全員が原点に立ち返り、積極的に新たな変革を推し進められると判断したからです。当社は2019年に創業130周年を迎えましたが、設立当時のチャ

レンジ精神を受け継いできており、これをさらに開花させる好機だと捉えています。日本酒業界には何百年という歴史を誇る蔵元が数多くあり、その中で当社は後発のベンチャー企業という位置づけでした。そこから果敢に挑み続ける先取の姿勢が培われたのです。例えば、「業界初」の取り組みの多さも、その証です。1961年に他に先駆けて「日本盛は良いお酒〜♪」で知られているテレビCMを放映。1987年に酒造りの副産物である「米ぬか」を活用した天然由来成分の化粧品「米ぬか美人」、1995年に健康をコンセプトにした、イノシトールが一般的な日本酒の約50倍

含まれている「健醸」を発売。その他にも2013年の蔵元直送・生原酒量り売り専門店（阪急西宮北口駅構内）、2017年の甲子園球場での生原酒サーバー販売の新展開も大きな話題になりました。

**白田** 直近で社長が手がけられた新商品がありますか。

**森本** 2019年に総合アウトドアメーカーの大手企業であるモンベルと「山で飲む日本酒」として、モンベルのロゴ入りのお酒「モンベルデザインボトル」や日本酒をアウトドアシーンで楽しむためのグッズとして、生原酒ボトル缶専用の保冷・保温効果のあるケー



心から願い、懸命に挑めば、  
夢は実現できることを  
北京五輪セーリング7位入賞で実感



今回の同志社人

森本 太郎 さん 【2003年 商学部 卒業】

もりもと・たろう 1980年生まれ、福岡県出身。2003年住友商事株式会社に入社。2005年に退職し、オリンピックに挑戦。その後、住友商事株式会社への復職を経て、2012年に日本盛株式会社へ転職。取締役営業本部副部長、取締役社長室特命担当、常務取締役営業本部長を務め、2020年に代表取締役社長に就任。

スとおちょこをセットにした「おちょこ付きクージー」も販売しました。需要が低迷する中で、これまでにない日本酒の飲み方を提案し、その裾野を拡大したいと考えたからです。この試みの一つが異業種とのコラボレーション戦略であり、反応は凄く良かった。モンベルには有料会員の方々が約96万人近くおられます。コアなファンの皆さんです。「モンベルがコラボしたのなら飲んでみようか」と思われたのだと推測しました。昨年の秋には、これも日本酒業界初の新メイクアップブランド「ケセラセラ」も発表しました。

日本代表になった先輩の壮行会で  
オリンピック挑戦を決意

白田 大学卒業後、住友商事に就職されたのですね。

森本 2003年に入社しました。銀行も候補でしたが、母親が大手総合商社で仕事をしており、商社を身近に感じていたので住友商事の入社試験を受け、採用になりました。同期には東京大学や京都大学の卒業生が数多くいたのですが、当初は「それが何だ!」と意気込んでいました。しかし、やっぱり頭が切れる優秀な人が多い。このままでは埋没してしまうという危機感を抱き、自分の個性を際立たせる方向に舵を切り、取引先の方々の懐に飛び込んでコミュニケーションを深めるようにしました。このようにして自身の立ち位置を定め、ビジネスマンとしての処し方を見極めてからは仕事が面白くなり、充実した日々を送ることができるようになりました。

白田 オリンピック挑戦を決意されたきっかけは何ですか。

森本 高校、大学はヨット部で練習に励みましたが、大きな成果を挙げることはできず、就職を機に区切りをつけました。再びヨットへの情熱が甦ったのは、2004年です。大学時代の一つ上の先輩がアテネ五輪の日本代表になり、その壮行会に出席した時です。日の丸が輝くユニフォームを着た彼女たちが応援に駆けつけた人々の真ん中に立ち、喜びではち切れんばかりの笑顔を見せていました。その姿が格好良く、圧倒されたのです。共に部活動に打ち込んだ身近な仲間が出場を決めたことで、「オリンピックは観るものではなく、出るものなんだ!」と気づかされ、心が燃えたのです。でも、直ぐに会社を辞めるわけにもいかない。最後の決断を促してくれたのは、同志社大学卒業後もヨットに専念していた松永鉄也さんからの電話でした。「一緒に組んでオリンピックを目指そうよ…」と誘ってくれたのです。周囲の猛反対を押し切って、2005年に住友商事を退職。日本代表の座を勝ち取り、2008年北京五輪セーリングで7位入賞を果たすことができました。

白田 日本盛に転職された経緯を教えてくださいませんか。

森本 オリンピック後に復職した住友商事で任されたのは、海外の工業団地の工場誘致の担当でした。担当地域はベトナムです。現地採用の社員を研修のために日本に招くシステムがあり、そのオフの時に日本国内を案内したのです。彼らは好奇心が非常に強く、何を見ても興味津々で、「あれは何ですか」と質問を連発します。しかし、私はほ





とんど答えられない。それまで、グローバル企業の第一線で活躍しているつもりだったのですが、「日本人なのに日本のことを何も知らない」ということを痛感し、愕然としました。そんな時、妻の父親で日本盛の社長（現会長）に入社を打診されたのです。日本盛は江戸時代からの歴史を誇る日本屈指の酒どころ「灘五郷」で時を重ねてきた酒造会社であり、日本の文化が深く息づく企業で働けば、私に欠けていたものを補い、これまで住友商事の仕事やヨットの世界で学んだことも、新たな分野で活かせると思ったのです。2012年に住友商事を退職し、日本盛に転職しました。

### 手応えを得ている新戦略で 日本酒業界に新風を吹き込む

**白田** 新たに推し進めておられる貴社の戦略を聞かせていただけますか。

**森本** 当社は「永遠のベンチャー企業」だと捉えています。挑みの姿勢を貫き、先進独自の商品開発や新分野への展開などで、お客様の支持を拡大していきたい。例えば、大吟醸は精米で外側の50%を磨きます。業界では、これが激化しており、さらに米を磨く会社も出てきています。しかし、この精米手法を追求するのが正しいのか。私はすでに限度に達したと考えています。だからこそ当社は2つの新機軸を決め、これを新たに追求しています。一つは「鮮度」です。阪急西宮北口駅構内での生原酒の量り売りでは、加水もせず、加熱殺菌もしていない生原酒をビンに移し換えて販売します。造ったばかりの新鮮なお酒の美味しさは格別で、これが女性客に大好評でした。しっかりと商品の魅力が伝わることを実感でき、嬉しかったですね。この結果を得て、全国に日本酒本来の美味しさを届けたいと思い「生原酒ボトル缶」を発売しました。「鮮度」の可能性は非常に大きいと確信しています。もう一つは、「健康」です。近年、お酒を飲む人の健康志向が高まっております。当社では健康をコンセプトにしたお酒「健醸」や、ふたつのゼロを実現した「日本盛 糖

質ゼロプリン体ゼロ」を業界で初めて発売するなど、業界でもいち早く健康に対して考えて取り組んでおります。企業の伸展を支える人材育成にも力を注いでいます。その象徴が創業120周年時に開始した社内活性化イベント「もっと活動」です。各自が現在の仕事以外の分野で新提案を具現化し、1年後に発表します。チームも部門を超えた横断型で組み、「新たな挑み」を見出していきます。この活動から駅ナカでの生原酒の量り売りの様な新事業も生まれています。また、「持続可能な開発目標（SDGs）」でも「健康」、「環境」、「地域貢献」を掲げ、積極的に取り組んでいます。

**白田** 数多くの貴重な経験の中でも特にヨットでの学びは大きいですか。

**森本** 無謀な挑戦であることは百も承知で北京五輪出場を目指し、世界の強豪を相手に入賞できたことは、やはり破格の経験になりました。「心から願い、懸命に挑めば、夢は実現できる」ということを実感できました。あの時、「今やらないと後悔する」と思い、決断したのですが、正しかった。本気になれ



ば、道は開けます。その後、仕事で壁にぶつかった時も、必ずできるはずだと、自分に言い聞かせています。住友商事を退社後、人のつながりの大切さも身に沁みましたね。スポンサーを紹介してくれたのも、その中の一人でした。大学時代に主将を務め、OB・OGの方々をはじめとするステークホルダーとの関係構築の重要性を知ったのも、貴重な経験になりました。私が大好きな言葉は、同志社に受け継がれる「偶儻不羈」です。後輩の皆さんも、自分の大海を見出し、真っ直ぐに突き進んでください。

### インタビューを終えて



インタビューア  
**白田 敦也** さん  
【スポーツ健康科学部 3年次生】

しらた・あつや 岐阜県出身。高校時代に野球部で「打席で肩の力を抜け」と繰り返し指導されたのをきっかけに、スポーツ心理学に関心を抱くようになった。ゼミでも心理的な要因がパフォーマンスに及ぼす影響を探究している。現在、ヨット部の副将を務め、「全日本学生ヨット選手権」団体総合優勝を目指している。

際立つ存在感に圧倒されました。それが森本社長の第一印象です。北京五輪への挑戦を決意された時の「今やらないと後悔する」という言葉は、特に強く心に残りました。住友商事を退職し、退路を断ってヨット競技に専念された果敢な決断力も凄い。このような強靱な精神力があるから企業を力強く牽引できるのだと実感しました。また、ヨット部の主将を務めたことで新たな気づきが得られたとふり返っておられましたが、私も副将としての経験を大切にしたいと思いました。ヨット競技だけでなく、これからの人生に対しても大きな勇気をいただいたインタビューになりました。

## My Job,

私と「仕事」

学生時代からの夢を追い続け、多彩な分野で活躍する卒業生

その姿が学生の皆さんの将来の

なかとり ゆう き  
中島 勇紀さん[2016年 法学部早期卒業 2018年 同志社大学法科大学院 修了]  
クリフォードチャンス法律事務所 外国法共同事業 弁護士世界中の弁護士たちと1つのチームとして  
案件に取り組めることが醍醐味です

## One day on the job



09:30

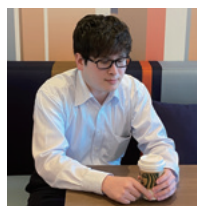
## 出社

1日の始まりはメールチェックから。リモート環境が整っているため、朝自宅で確認・対応することもある。



11:00 契約書作成

1つの案件で最終的に必要となる書類は膨大であり、そのドラフトやレビューを行います。



15:00

## コーヒープレイク

事務所内にあるカフェスペースで、コーヒーを飲んで気分転換。



17:00

## 打ち合わせ

担当クライアントがヨーロッパ圏の場合、時差の関係で夕方以降に打ち合わせをすることもあります。

## Off time



趣味はミュージカル鑑賞とサイクリング。千葉県の方でサイクリングに行くこともあり、海沿いを軽快に走ることがリフレッシュに。

クリフォードチャンス法律事務所は、英国ロンドンを本拠地とする、世界有数の法律事務所です。私はその東京オフィスで、不動産取引や金融商品取引法関係の仕事をしています。企業が取引をしたり、海外の投資家が日本で投資をしたりする際、各国の法制度や文化などの違いを乗り越えて取引を成立させるためのサポートです。主な業務は、契約書類の作成や連絡調整、交渉など。弁護士1年目で知識や経験が浅いとはいえ、クリフォードチャンス法律事務所として仕事をするからには、トップクラスとしての結果を出さなければなりません。プレッシャーはありますが、一つひとつの業務に向き合い、上司に助言を受けつつ自分の中で最良だと思える選択をするのみです。その上でクライアントから満足の言葉をいただくと充足感を得られますし、次はそれ以上に頑張ろうという意欲にもつながります。

外資系事務所で働く醍醐味は、同じ案件を世界中の弁護士たちと1つのチームとなって取り組めることです。また、弁護士の仕事は常に激務だと思われがちですが、必ずしもそうではありません。外資系事務所には余暇や家族との時間などプライベートを大切にできる文化があり、私生活と仕事のバランスが取りやすいことも魅力の

一つだと感じています。

同志社大学での学生生活の中で、現在に生きているのは、国際人道法模擬裁判大会（主催：赤十字国際委員会）へ出場した経験です。学部3回生の時には国内予選で優勝し、アジア太平洋大会で各国を代表する24チーム中、弁論の部で9位、書面の部で3位入賞という成績を残すことができました。本番で弁論を行う経験はもちろん、何カ月も前から主に英語の文献や判例をリサーチし、膨大な量の法的文書を英語で作成するという経験は、他では得られないもの。さらに、世界中から予選を勝ち抜いてきた実力者たちが集まり、同じ事案を同じ国際法に基づいて考え、議論する中で仲間になっていく。そんな世界とつながる経験ができたことも有意義でした。

そして、司法試験合格を力強く後押ししてくれたのは、法学部の早期卒業制度。法曹を目指す学生にとっては願ってもない制度です。学部生活を1年短縮できるだけでなく授業料の免除も受けられたため、時間と経済的な負担を大きく軽減できました。

同志社大学はとにかくリソースが豊富で、「これがやりたい」と思えば叶えられる環境があります。意志さえあれば何でもできる場所なので、後輩の皆さんもぜひ、自分の興味のあることに挑戦してみてください。



# My Life

第85回

を訪ね仕事に挑む熱い思い、今後の目標などをインタビュー。

キャリア・プランに役立てば幸いです。

きむらるか  
**木村 瑠花さん**

[2018年 社会学部教育文化学科卒業]  
広島市立小学校教諭



## 子どもたちの多様な個性と向き合いながら 勉強・生活の両面からサポートできる存在に

昔から子どもが好きで、漠然と小学校の先生に憧れていました。でもいろいろな可能性を模索しようと同志社大学に進学。社会学部で世の中の様々な問題について学ぶ中で、「私はやはり小学校の先生になりたい」と将来への思いが明確になりました。子どもたちとキャンプをするサークル「同志社ワーキングコース」での活動も、夢への大きな原動力になった気がします。

2年次から3年間、神戸親和女子大学と連携した「小学校教諭免許状（一種）取得プログラム」を履修しました。この受講は進学前から選択肢の1つとして考えていました。基本は通信講座なのですが、実技のためのスクーリングで何度か実際のキャンパスにも足を運びます。そのとき他大学の学生たちと交流の輪が広がり、励ましあったことが最後まで自分を支えてくれました。教員採用試験対策では、参考書が充実した学内の施設、教職課程指導相談室も活用しました。

地元の広島市で小学校教諭になって3年目、今は5年生の学級担任をしています。子どもたちの「わかった」「できた」という笑顔はこの仕事の何よりの喜びで、そんな瞬間をたくさん増やしていきたいと考えながら教えています。いまだに“正解”は見つかりませんが、「自分が子どもならどんなこ

とに興味を持つだろう」「この子ならどうするか」と、子どもの視点に立つことを心がけるようにしています。また勉強だけでなく、生活する上での当番を決めるなど、学級運営も教師の大事な役割です。子どもたちが学校という場で楽しく過ごせるように勉強・生活の両面からサポートしていける存在でありたいです。

大学での学びは、様々な形で私の中に根づいています。ゼミでは、小さいころのかわりが発達過程にどのような影響を与えるか、教育心理学について研究しました。ゼミの指導教員からは自分の考えをはっきりと主張することの大切さを学び、一方で多様な人のものの考え方に触れることで自分の視野も広がりました。いろいろな目標、動機、価値観を持った人たちがキャンパスに集う同志社だからこそできた経験です。多様なものを受け入れる態度は、個性の異なる子どもたち一人ひとりと向き合う上で、私の指針になっています。

小学校教諭を目指す後輩の皆さんに何可言えれば、それは大変な道のりかもしれないけれど、同志社でしか得られないものは必ずあるということです。将来、多種多様な職業に就く人たちと出会えることも財産で、私も全国にそんな友人を持ち、今も連絡を取り合っています。

### One day on the job

🕒 08:00 出勤



🕒 08:45 教室で授業

子どもたちの目線に立って、授業をすることを心がけています。わからないところは、時間をかけてみんなで考えることもあります。



🕒 12:30 給食・掃除

給食や掃除も子どもたちと一緒にいきます。配膳や掃除の仕方などを教えることもあります。



🕒 16:00 教材研究・会議

明日の授業の準備をします。学校行事の準備がある時は、様々な作業を行うこともあります。

🕒 19:00 退勤



### Off time

コロナ禍ではなかなか実現できていないのですが、休みの日は、学生時代の友人と旅行に行くことが多いです。





中学生時代



## 小惑星探査機「はやぶさ2」のサンプルリターンカプセル観測で JAXA(宇宙航空研究開発機構)との共同研究を実現 ミッションは「人工物の再突入が及ぼす無線通信障害の有無」

プロジェクトのメンバーは中山尚さんの他に川地卓平さん(中部大学工学部2年次生)、田中康暉さん(東京大学理科I類2年次生)、河村朋治さん(愛知工業大学工学部2年次生)の4人。いずれも岐阜市出身。中山さんと川地さん、田中さんは中学生の頃からアマチュア無線に熱中し、ロボットコンテストにも挑んだ親友で、高校時代に河村さんが仲間に加わり、大学進学後も交流を続けてきた。一昨年末にJAXA(宇宙航空研究開発機構)の「はやぶさ2サンプルリターンカプセル観測研究テーマ提案募集」を知った田中さんの呼びかけで応募し、今回の快挙につながった。プロジェクト名は「Hayabusa2 Radio Wave Reflection Project」。提案テーマは「流星バースト通信」に関する研究で、ミッションは「人工物の再突入が及ぼす無線通信障害の有無」。「流星バースト」とは、流星などが大気圏に突入する際に生ずる電離気体(プラズマ)のことで、「流星バースト」に地上からの電波を反射させ、これを受信・観測することを「流星バースト通信」と称する。

「このコロナ禍で打ち合わせはオンラインとなり、各自が図書館などで知見を深めて提案内容を詰めながらの活動となりました。対面で協議したのはプレゼン直前の数日間でした」。発表時はそれなりの手応えを感じてはいたが、採用通知を得た時は、まさに夢心地だったという。

「はやぶさ2」は2019年に小惑星「りゅうぐう」の地表と地下の両方から試料の採取に成功。2020年12月5日午後にカプセルを分離した後、軌道を変更して地球圏を離脱し、新たな小惑星の探査に向かった。地球に投下されたカプセルは12月6日の真夜中にオーストラリア南部

ウーメラ近くの砂漠に着地し、無事に回収された。「今回の試みは世界各国が注目しており、この快挙には本当に感激しました。私たちもJAXAとの共同研究という得難い経験をさせていただき、今振り返っても『現実だったのか…』と思うぐらい有意義な時間を過ごすことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、私たちメンバーはいずれも学部生なので、研究費や補助金を得ることができません。そこで費用はクラウドファンディングで募ることにしました。結果的に予想を大きく上回る300万円以上の支援金が集まり、これも貴重な体験になりました。ただ、一つ残念だったのはコロナ禍の影響で現地に行けなかったことです。当初はJAXAに同行して自分たちの手で観測地にアンテナを設置し、SDR(広帯域の周波数の電波を受信できるソフトウェア)でカプセルによって生じた「流星バースト」に反射した電波を受信・観測する予定だったが、実際はJAXAに代行を依頼し、そのデータに基づいて詳細な報告書を作成中である。現在、その作業と併せて、これからの持続可能な宇宙開発に貢献できるこの研究の継続化を全員で多角的な視点から検討している。

中山さんは歴史ある京都で国文学を研究したいと考えて同志社大学に進学したが、文系理系を区分する発想はまったくない。「やってみたいと思ったら分野に関係なく積極的に挑むというのが私のスタンスです。この姿勢がJAXAとの共同研究という素晴らしい扉を開いてくれました。後輩の皆さんも、興味を抱いたことがあれば、迷うことなく果敢にチャレンジしてほしい。きっと新たな世界が広がります」と、熱いエールを送る。

Hayabusa2  
Radio Wave  
Reflection  
Project



なかやま なお  
**中山 尚さん**  
【文学部国文学科 2年次生】  
※学年は取材時の学年。